
魔法世界に降り立った砂の王

無名の新人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界に降り立つ砂の王

【Z-コード】

Z2909S

【作者名】

無名の新人

【あらすじ】

世間から嫌われてきた青年が神に力をもらい好き勝手する話です。

(注)この小説には外道成分が含まれております

プロローグ（前書き）

初投稿です。
感想等貰えたら嬉しいです。

プロローグ

今俺は白い空間に居る

トライクに轢かれて死んだ俺は気が付いたらこの空間に居た
目の前に居る神と名乗る男によればどうやら転生させてくれるらしい
理由を聞くところによると『暇つぶし』だそうだ

そして転生先の世界とそこでの人生についてつままで決めさせてくれるらしいから今は神にその事について考える時間をもうつ
たところだ

「暇つぶしにならんから俺が楽しめる世界で頼むぞ」

てっきり元の世界に転生するものと思っていたからそんなこと言わ
れてもとっかに思いつかないな。

そうだな ネギまにするか、俺TUEEEEとかそういう
状態になつてその後原作キャラでハーレムでも作ろつ。

「ネギまの世界でお願いします」

「わかった、それで3つ決まったのか?」

「いえ、まだです」

「せつと決めろボンクラが」

「・・・わかりました」

こいつもかどいつもこいつも俺を軽んじやがつて、生前も散々いじ
めにあつた。

俺がブサイクでコタクだからって唯それだけの理由で家族までも『

「見た目で相手を圧倒できる力が欲しいです」

「つまりお前を見た相手が恐れられる様な見た目にしようと
か？」

「いえ、なんとか本能的に恐れられるような雰囲気と言います
かカリスマをお願いします」

「へえ、良いじゃん、お前を見てビビる馬鹿どもの醜態が乐しみだ。
で、他は？」

「まだ考へ中です」

「だから一度で決めり何度も同じことを言わせるなよ」

「すいません」

「今ので腹立つて、わざと決めないと別の奴選ぶから」

「わ、わかりました。わざと決まんでもう少し待つて下を」と

クソ！ やつをと決めねえとヤベ

やつと俺が望んだ通りのことの出来るのに

こうなつたら適当に王の財宝とかにしてやつせと「そんな向こうに行
つても面白くなさそつな能力選ぶんだつたら別の奴選ぼうかな」 ツ
！ ！

心を読まれた？ なら今までの暴言も全部聞かれ「余計な」と考えて
んじやねえよ、俺はやつせと決めりつたよな？」

「す、すこません」

そうだ、早く決めねえと！

ネギまで尚且つコトヤツを・・神様を楽しめらるよつな内容考えないと

さつきの口振りからしてネギまの奴らをボコつた方が楽しめることが出来そうだ

ネギまの奴らがビビるよつな能力・・もしやまばビビるよつなボコり方が出来る能力か

「決めました」

「なんだ？」

「スナスナの実の能力と物事の利益をすべて判断出来るよつにして下さい」

「わかつた、なら行つて来い」

そう言つと俺は転送された。

その時俺が考えていたのは当初考えていたハーレムなどが出来る喜びではなく、生き残るためにこの神様をいかに楽しませるかだった。

プロローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
更新は不定期になりますが頑張つて完結させたいと思います。

戦場に降り立つた青年（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

戦場に降り立つた青年

辺りを見渡すと戦場のド真ん中だ
時期がわからないがあいつも原作に関わる時期に送るだらつから多
分大戦の最中だろう

「ヒツ！」

「な、なんだこいつはばどこから出て來た！」

「ほ、本陣に連絡しろー。」

流石に何もないところから人が出て來たら警戒されるだらうな
それにして本陣に連絡とはビビリ過ぎじゃないのか？

つて、あいつに貰つた能力の所為か
・・・何か楽しくなつてきた

生前、人に対してビビりながら過ごしていた。

それが今はビビられる立場か

「お、おい

「ああ？」

「ツー貴、貴様は亜人共の仲間か？」

ドスを効かせた声色を選んだつもりだったが想像していたよりも反
応が薄いな

・・・やはり今まで人を脅した事なんて無いから上手く出来ないの
だろう

俺としては眼光だけで相手を黙らせたいもんだな

そういうのはやはり格好が良い

まあ、その内出来るようになれば良いか
「その口振りだと連合の人間か」

「そ、 そ う だ が。 お 前 の 所 属 は ど つ ち だ も つ さ と 言 え ！」

「こいつ偉 そ う だ な

殺すか

こうして俺は初めての殺人に至った。

-連合の兵士 s.i.d.e -

この青年が現れた時は驚いた

何もない空間から突然現れたのだから

しかし驚いた理由はそれではない、それだけならただの転移魔法で説明できる。

問題は青年が纏つた雰囲気だった

彼を視認した途端足が動かなくなつた

しかし見た目が10代中盤の青年だという事が確認できたので所属を聞こうと声を掛けるとかなりドスの効いた声で返された思わず怯んでしまつたが所属を聞くと聞き返された不審に思いながらも答え、再び所属を聞いた

すると青年の雰囲気が明らかに変わった

まさかこいつは亞人の仲間か？

「どうした？ 何故答えない！？」

目の前のマントをはおつた青年に再び所属を聞いた
すると足を何かに掴まれた

見てみると何かが体にすごい速度で纏わりついてきた
「な、何だこれは」

体がどんどん持ち上げられていく

これは・・・砂？

纏わりついているものが砂だと認識するのとほぼ同時に彼の表情が
見えた

彼は私を見ていた

その表情から読みとれる感情は怒り

ああ、私は彼に殺されるのだと認識すると同時に体に圧力が掛かる
のを感じた

戦場に降り立つ青年（後書き）

感想等戴ければ嬉しいです。

紅毛賈と青年（前書き）

誤字脱字等の「」指摘いただければ嬉しいです。

どうせなら派手に殺すか

どうやらこりは砂が多いようだ

「どうした？ 何故答えない！？」

兵士が何か言つてゐるが俺は氣にせずに辺りの砂を奴に絡みつかせる。

俺がやろうとしている技は我愛羅が使用していた砂漠葬送だ
漫画で読んでいたからかイメージしやすい

「な、何だこれは」

今頃自分の状況に気付いた様だがもう遅い
奴の体が地を離れていく
周りの兵士は茫然として何も出来ないでいる
奴の体が砂の圧力で軋んでいく
「見せしめだ。砂漠葬送！！」

手の平を握り潰すと同時に奴だつた物が辺りに飛散る

一瞬の空白をおいて

辺りの兵士はやつと状況が理解できたらしく
しかし襲い掛かつて来る者はごく少数だ
殆どのは顔を青ざめて何も出来ないでいる。
中には腰を抜かしている者

あまりの恐怖からなのか無惨に飛び散つた同僚の姿を見たからなのか
そのどちらかの所為で限界を超えて嘔吐している者

なる程、惨たらしく殺せば恐怖心を助長せることが出来るのか

目の前に居るのは訓練を受けてこの戦場へやって来た兵士
この中には今まで何度も戦場に出て来たことのあるような歴戦の猛
者とか言われる奴らも居るのだろう

そんな奴らがここまで恐れ様
こいつらが見てる俺ってどんな感じなのだろう・・・多分俺が見た
ら気絶しそうだな

襲い掛かつて来た兵士の攻撃は俺の体を通り抜け、俺には一切のダメージが無い

「この力だ!!!」この力で今までの俺を変える!!!!!!

「効、効かないだと！？何を座り込んでいるんだ！？早く呪文を「しゃらくせえ！！」な、何だ！？」

流砂を発生させて周りの兵士を地中に引きずり込んだ
クロコダイルが使っていた砂漠の向日葵という技だ
「た、助けてくれええ！！」

「ひっぱり上げてくれえーーー！」

流砂の周りにいる兵士達が助けようとするが、どんどん広がる流砂に足を取られそいつらまでもが引きずり込まれていく

「ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハ！」

辺りが砂以外無くなつた頃

連合の本陣から送られてきた増援が来たようだ

-ナギ・スプリングフィールド side -

前線で敵を蹴散らしているとアルが声を掛けてきた
「本陣から右翼へ行けという指令がきました」

「何でだよ？」

「どうやら帝国からの刺客が来たようです」

「わかった、わざわざ俺を遣わすとこいつはよっぽど強いんだろ
うな。ワクワクしてきたぜ！」

「はあ、お前つて奴は」

近くで話を聞いていた詠春が何か言つてゐるが関係ねえ
俺たちは右翼へ向かつた

そこでは見たのは一人の男を中心に流砂が起つており、連合の兵
士がどんどんその流砂に引きずり込まれてゐる光景だつた
「ヒヤハハハハハハハハハハハハハハ！」

兵士の悲鳴が辺り一面から聞こえる中で男は嗤つていた
「な、何だあいつは！」

詠春が驚くのもわかる

この地獄を作り上げ、なおかつ嗤つているとはな
すると流砂が収まつたようだ
「よし、攻めるぞお前ら！」

皆に声を掛けて奴に攻めようとする

すると今の俺の声で気が付いたのか奴と目が合つた
その瞬間背筋が凍りついたような感覚が走った

紅毛賈と青年（後書き）

神様は恐怖力リスマを上げまくったみたいですね

原作キャラとのニアーストコンタクト

あれは紅き翼の奴らか
まあ、あの神様は奴等がいる戦場に送ると思つて居たがこんなに早く出合うとはな
そして紅き翼とは反対方向では帝国の兵士がこつむきに近付いて来て
いる
さて、どうするか

この場から離脱するのは難しいだろう
それにもし離脱などして原作から逃げようものなら神様に何をされるか解らん
此処で一番得策なのは

俺を指差し号令をかけているナギと田が合つた
その顔を見て今まで嗤つっていた顔が更に歪んでいく

—ナギ side—

俺の背筋が固まつた直後、あいつが足下からどんどん消えていった
！？何だあの魔法は！？
いや、それよりもあいつは何処へ行つた！？
俺の号令で動き出していたアル達と本陣からの増援で来た兵士達も
足を止めた
辺りを見渡しても見当たらない
「バラけて居てはいけません！」

アルが俺達を含め、兵士達に大声で呼びかける

兵士達は突然大声で話を始めたアルに皆驚いてその声の方向へ目を向けた

研が向商が何處から出て来るのか解らない状況でノミ門にては危険だ

そう思つてアルが居る方向へ身体を向けるとアルからは死角にしている位置での男の上半身が形作られて居るのが見えた

卷之三

あの男が上半身だけ浮いていいる状態でアルのそばに倒た兵士の首を締め上げていたからだ

一九〇二

アルの方向へ向かっていた兵士はそのおぞましい光景を見てパニックになり、途端にバラけてしまった

アハの声は反応した者 おぞらく口には思ふ貴がこの光景を見てしまつてゐる

アハも自分のすぐ近くで起こっているその光景を見て動にすにいる各言つ俺も身体が竦んでしまつてゐる

奴が自分から一番近い兵士に向けて手から何かを飛ばした
身体が動いた時は既にそれが逃げている兵士の胴体を切り裂いた後
だつた。

原作キャラとのニアーストコンタクト（後書き）

感想戴けると嬉しいです。

帝國への就職活動（ハローワーク）（面接セミナー）

楽しんで貰えると嬉しいです

帝国への就職活動（血口アピール）

身体を足元から砂に変えて姿を消す

連合の兵士を殺しまくつた今、紅き翼と共に闘るのはほぼ不可能だ
ろう

この状況で俺が選べる選択肢は一人でこの大戦に介入するか、もしくは帝国側に付くかの二つ

介入しなかつたら神様から殺されそうだ

それに俺自身は介入する気満々だから介入しないとか言うのを選択肢に入れる気は更々無い

一人の場合を考える

来たばかりの世界を一人で行動するのは流石に厳しいだろう

逆に帝国についている場合のメリットはこの世界に来たばかりの俺の立ち位置を明白に出来ることと、帝国の庇護を受ける事が出来ること
デメリットは連合、というより紅き翼に手札を見せなければならぬことと、最低でも大戦の間は帝国の言いなりになることだが、どう考へてもメリットの方がでかい

大体手札も糞も俺に出来るのは砂を使った攻撃のみだからな
一人で介入するとしても見せなければならぬだろう

次に帝国の言いなりになることだが、それは仕方ないだろう
何もせずに庇護を受ければなるとは思っていない

その為にはこの場で帝国に俺を売り込まなければならない
連合を相手にして後ろの帝国兵士に俺の力を見せつける
紅き翼に圧倒的勝利をすれば紅き翼に對しての抑止力として受け入れて貰う事が容易になるだろう

正義馬鹿どもは俺を見付けようとして隊列を乱している

これは好都合だと思ったが、アルビレオが兵士に注意を促した
此れでは一人ずつ殺して行く事は不可能か、もう少し早く動けば良
かつた

が、兵士はアルビレオに注目してるだけで隊列を戻していない、どうやらい次の指示を待つていいようだ。

成る程この馬鹿どもは何から何まで指示されないと動けないタイプか
其れならばアルビレオがさらなる指示を出す前に殺していかなくては

ほぼ全員がアルビレオに注目しているこの状況で標的にすべき馬鹿
はコイツだ！

俺はアルビレオの死角の位置に居る一番奴から近い兵士を馬鹿から
良く見える様に掲げてそのまま水分を奪う

この場に居る恐らく全員が俺とみるみる萎んでいく兵士を見ている
予想通り兵士達全員にパニックが起こうた

どうやら神様は俺が虐めを受けるのを防ぐ為だけに選んだ能力に予
想以上の効力を持たしてくれた様だ
逃げまわる敵をドンドン殺していく

まるで一方的に攻撃出来るFPSをプレイしている気分だ
ゲームが上手い人達はこの様な気持ちなのだろうか
嗤える、嗤う、嗤えてくる

こんなに楽しい事は初めてだ
だつてそうだろ？

生前20年程生きていてこんなに笑った事はなかつた
手が止まらない、身体がもつと娯楽を求めようとする

すると突然上半身が弾け飛んだ

何だ？何が起こつた？

どうやらナギの糞餓鬼が俺に魔法を放った様だ
ゆるせねえ、許せねえ！赦せねえ！！

俺は今まで散々苦しんだ筈だ！

今度は俺が楽しむ番だろう？

其の楽しみまで奪う気か！？

俺を倒したと思つて安心したのか地面に座り込んでいたナギの後ろで身体を作り直す

そして油断しているナギに砂を絡み付かせる

ナギは何が起こっているのか解らず逃げようともがくが、もう遅い

だが次の瞬間俺の身体が潰れた

何が起こったのかは直ぐに理解した

「ナギ！！今すぐ撤退だ！！」

詠春がナギに呼び掛けるが腰が抜けてしまつて立てない様だ
逃がすか！

再び身体を構築する

その途端にまた身体が潰れた

その間に詠春はナギを担いで撤退を始めた

追い駆けようにもしても俺が優れているのは砂の扱いだけ
砂では奴等の速度に追い着けないだろう

「糞がッ！！」

連合の兵士も今の内に逃げ去った様だ

此の併此処に居たら更に連合から増援が送られて来るだろう

そう判断した俺は後ろで見て居た帝国の兵士に話し掛けた
かなり警戒されていて武器を向けられたが帝国に仕官したいという旨を伝えた

すると警戒は解かなかつたが兵士の一人が本陣へ駆けて行つた

此れで目的達成か

自分の中が満たされる感覚がした

どうやら兵士を殺す事よりも、思い通りに物事が進んだ方が手に入れられる満足感は多い様だ

そんな事を思いながら戻ってきた兵士に連れられ本陣へ向かった

・・・よく考えればあの場でナギを殺していたら原作ブレイクし過ぎて世界が此れからどう動くのか解らなくなつていたな

一時の感情で原作知識を持つていてるメリットを失う所だつた
俺は本陣の近くでそんな事を考えていたのだった

目標（前書き）

ナギ視点です。

誤字脱字等ありましたら、指摘下さい

-ナギside-

あんちよこを用意し奴の方へ向かう

この数秒間にも連合の兵士が殺されている

奴が魔法の射程内に入った

もはや俺はあいつしか見えない、一度でも奴から目を逸らしたら殺される

そう本能が告げている、現に奴が優先的に殺すのは背を向けて逃げる兵士だ

まさに外道

そんな事をすれば真っ先に敵に罵られ殺されるだろう

しかし、それを行うのが誰も止められない圧倒的強者ならば？

もしその光景を一度でも見れば誰も刃向かおうとはしないだろう

ひょっとすれば奴はその事さえも狙つて行っているのかもしれない

だが俺が此れだけ恐怖する相手は俺の事が眼中に入っていないように嗤い、殺しを続けている

いや、本当に奴の眼には千の呪文の男は居らず他と同じ様に逃げる事も刃向かう事も出来ない弱者にしか映っていないのだ

並の相手なら腹立たしい事この上ない

それが当たり前と思えるあいつは間違いなく別格なのだろう

それに奴の視界に俺が収まっている間は攻撃出来ない

今、攻撃を行つてゐるのは奴だけ
手を出せば殺される

連合の兵士はそんな事を考えながら殺される
俺もそれと同じ思考に陥つてゐる訳では無い
だが誰も反撃してい無いこの場、それも奴の視界の中で反撃をする
そんな攻撃を避けられない相手とは思えない
殺るなら一撃必殺

後手に回つて勝てる相手では無い
そんな事を考えていると奴が背を向けた

今だ！

奴に近付き、確実に避けられない位置、それも後ろから魔法を放つ

殺つた！！

手応えあり、恐怖の権化の様な奴はもう居ない
フツと身体の力が抜け、へたり込む

これ程恐怖しているとはな

周りの兵士も奴が消えた事により徐々に落ち着いてきたようだ

すると突然身体に何かがまとわり付いて来た
それが全身に絡みつき身体が浮き上がる

逃げようともがくが逃げられない

其れでももがき続けていると殺した筈の奴の憤怒の表情が見えた
何故生きてる？

あの時確かに消し飛んだ筈だ

・・・消し飛んだ筈？死体は？

そうだった、奴は姿を消すことが出来るんだ
死体の確認もせずに殺したと思つてしまつた

そんな事を思つていると身体を拘束していたものが急に力を失い俺と一緒に地面に落ちた

何時の間にか眠つていた様だ

周りにはアルと詠春、一人先陣で帝国兵を倒す為に残つたお師匠が居た

するとアルが俺に話し掛けてきた

「心配しましたよナギ？」

「？？何の話だよ？俺は確か、・・・あいつは！？あいつはどこだ！？」

俺はアルに俺が殺される寸前にアルと詠春に助けてもらつた事を教えて貰つた

アル曰く精神が耐え切れずに氣絶したらしい

精神がそんな状態に陥つたのは助かつたと思った直後に奴の憤怒の表情を見たからだろうな

命が危なかつたのに自分がかなり落ち着いている事に気付く

死を覚悟したのに生きているから戸惑つてゐるのか

それとも奴の憤怒を受けたから一皮向けたのか

どちらなのか解らないし、両方なのかも知れない

何せあんな経験初めてだからわからないな

今、心から生きてる事を嬉しがつてゐる、負けたつて言つのに俺は負けて仕方が無いと思つてゐる

明らかに別格、そんな相手だつた

だから仕方ない、そう考へてる自分に腹が立つ

何が千の呪文の男だ

あいつの前に立つて自分が今まで世間知らずのガキだったと解る
結局俺も弱者だったんだ

・・・だが今回の事で田標が出来た

「なあ、お師匠俺あんちょこ使つのやめるよ」

あいつが俺を敵だと認識させると強くなつてやるー

俺はお前と対等の立場になりたい！

待つてろよ・・・・・

「あ、俺あいつの名前知らねえや

目標（後書き）

ナギにライバル認定されました
感想頂けると嬉しいです

—テオドリside—

父上が最近帝国に引き入れた人物が行く先々の戦争で連合の陣営の悉くを殺しているらしいのじゃ

其れだけならまだしも背を向けて逃げる敵、投降してきた相手まで殺している様なのじゃ

周りの兵士はそやつが恐ろしくてその行動を止めさせぬといふか注意さえも出来ずにいるのじゃ

その様な者など軍を辞めさせてしまえば良いと思つたが聞けばそやつはかなりの実力があり紅き翼をも退ける事も可能なレベルらしいのじゃ

実力はあるからその分天狗になつていてるよいのじゃの

強き者こそ他の兵士の手本とならねばいかんの

その事をきちんとそやつに教えねばならん

そやつも真撃に理由を話せば理解してくれるのじゃ

妾は護衛を連れて父上がそやつに『えた家に赴いていの
通常なら向こうが来るものじゃが父上が何度呼び出し何度同じ事を
言つてもそやつは同じ事を繰り返しているのじゃ
ならば此方から出向いて妾が本気だと言つ事を示さなければならん
じやりつ

そやつの家の前に着いて驚いた
豪邸とまでは言えないがそれなりの家に住んでこひつるよいのじゃ
帝国の一般水準を軽く上回っているだろつ

父上から此れほゞの家を与えられておきながら言ひ事を聞かんとは
なんだか腹が立つてきのじや

護衛の兵士がドアをノックする
するとドアが独りでに空いた

此れは入つて良いのかの？

中に入ると目の前に砂埃が立ち上がりそれが人の形を成して行つた

「第三皇女のテオドラじや、お主がクロコダイルかの？」

それに答えように目の前にやつが現れた

やつの姿を見た途端に身体が底冷えする様な寒さに襲われた

名前（後書き）

感想、誤字等あれば宜しくお願ひします

第一の人生（前書き）

感想とか（ry

第一の人生

あの後国王と会うことになった
紅き翼を退けることができる奴が仕官したいと言つて いるんだ
直接見てみたいと思うのも仕方ないだろう
帝国の救世主になるかも知れないんだからな

王座の間に通された

護衛の兵士が途端に警戒を強める

しかし国王は動じていない様に見える

まず名前を聞かれた

当然だらう、名前もわからない相手を仕面させるとは思わない
名前か、

「クロコダイルと呼んでくれ」

俺はクロコダイルと名乗る事にした

今までの利益云々考えながら行動したが今回は気持ちの問題だ

生前の名前など使つていたら嫌な事が思い出される

親が付けてくれた名前を大事にする気などさらさら無い

親でさえも俺を疎んでいたのだから

しかもクロコダイルと言つ名前が妙にしつくり来る

神様が催眠でも掛けているのだろうが産まれてから死ぬまでの何十年使つていた自分の名前にもはや興味など持てず、クロコダイルと言つ名前が本当の名前の様な気さえする

仕官をする条件として衣食住の確保とそこそこの給金を要求したが

すんなり受け入れてくれた

それだけ紅き翼に手こずっていたのだろう
もつと金を要求するのも有りかもしけん
だが此れから少なくとも数年間世話になる職場で金にがめつい奴と思われるのも本意じやない
此方もある程度は譲歩すべきだろり

その後家の下見かつ街の散策をする事にした
ついでに服などの日用品も買わないとな

まずは服屋に寄った

さて服を買おうか、と思つたといひ問題がでた
どれを買えばいいんだ？

生前に自分で服を選んで買つた事などなかつた
いや、有るには有つたが値段で選んでいた
新しい人生だ、どうせならかつて良く決めたいものだ
まあ着飾つたところで顔が悪いのは変わらないが
・・・自分で言つて悲しくなるな

ま、まあ店員に選んでもらおう

金の価値は解らんが服を買つぐらうで無くなつはしないだろり
「俺に似合つ服を見繕つてもらえないか？」

「わかりました、どんな服装にしましょ？お客様が今お口しになられて居る様なタイプにしますか？」

あ、そうだった

俺の服装が死んだ時の服装と変わつてたんだ
クロコダイルが着てゐる様な服装になつてゐるんだ
そう思い鏡を見る

「なつー・マジかよー」

「ど、どうかしましたかお客様？」

鏡の中に居たのはオールバックの眼つきが悪い青年だった
「い、いや何でも無い」

あの神様がやつたのか?
それしか考えられない

何故? 悪ふざけなのだろうか?

流石に顔まで変わっているとなると動搖する

店員も不思議がつて居る様だ

「どんな服が有るのか全く解らんのだがこの服と同じタイプの服装
から選んでくれ」

「は、はい。少々お時間いただきますが宜しいですね?」

店員が服を見繕つて居る間に自分の姿を見る
眼つきがかなり、とっても、非常に悪い所を除けば悪く無い顔だ
まあ、前の顔が底辺だつたからな

でも前の顔が酷かつたことを抜きにしても男前な面構えだ
着ている服はまるつきりクロコダイルが着ていたのと同じ服装だ

服装から考えるにこの顔はクロコダイルをモチルに作ったのだろうか
顔をよく見るとあまり覚えていないが記憶の中のクロコダイルと一
致する

若き頃のクロコダイルつてとこか

動搖していた気持ちも收まつてきた様だ
見た目は良くなつたんだ

悪い事では無い

ただ既に前の顔を忘れてしまっている
此れも神様の仕業なのだろうか

少し寂しく思う

馬鹿にされたりもした顔だがなくなつてみると悲しいものだ
そう思いながら店員の呼ぶ声に気付き試着室に入る

一通りの日用品を買い揃えて地図に記された家へ向つた
「これは、結構期待されてる様だな」

着いた家はなかなか良い一軒家だつた

俺はそのまま家に入つてすぐにベッドに入り眠りに着いた

其れから暫く経ち俺は行く先々の戦場で虐殺を行つて来た
紅き翼に当たつた事も有つたがもちろん俺が勝つた
しかし解せないのがナギだ

奴は俺を恐れている、だがそれ以上に俺と戦つ事を楽しみにしてい
る様な節がある

まあ、俺に水と霸氣以外は効かないから負ける心配はないから構わ
んが

あと、霸氣と言えばこの世界には氣と言つものが有る

これは霸氣とは全く別物、の筈だがあの神様が何かしていない証拠
も無い

まさか氣による攻撃を受けてみる訳にもいかんだろう
だから詠春とジャックラカンに関しては警戒しまくつてはいる

次に水だがこの世界は水を使う魔法がある

だがかなりの使い手では無い限り俺を攻撃する事すら出来ないだろう

まあ、この辺りが命に直結する問題か

俺も帝国でそこそこ名も売れて来た

其れなりに楽しい第一生を今の所送っている

最近は葉巻にも手を出した

最初は格好付ける為に吸つて居たのだが、段々癖になってきた

しかし、面倒なのが陛下が俺に何度も自重しないと黙つて来る事だが、

まあ結果は出しているし問題は無いだろつ

兎に角今は名を売るチャンスだ

原作開始時には紅き翼と同じ知名度を誇りたいものだ

お?

来客とは珍しいな

砂を使って扉を開け中へ招く

そして客の前に姿を見せる

「お主がクロコダイルかの?」

第一の人生（後書き）

風邪引いた

【 speech 30%】 皇女殿下、私は帝国の為に頑張ってこめた『星』（新

しんどくて感想に返信出来てません
すいません、治り次第返信をせて頂きます

【 speech 30%】 皇女殿下、私は帝国の為に頑張つてこよや《壁》

「これはこれは帝国第三皇女様が何の御用で？」

いやはや驚いた、まさかテオドラが来るとはな
一体何の用だ？

俺のファンと言う訳では有るまい
おそらくは散々注意されても直さない戦場での振る舞いだろう
「单刀直入に言うがの、戦場での虐殺とも言える行為を止めるのじ
や！お主の行ないは非道極まりない！」

戦争中の人としての在り方など関係ないだろつ
それにあれだけ楽しい事を止められるものか
「いやあ、そうまで言わると傷つきますね、僕は帝国の為に働いて
いるだけなのこ」

「帝国の為を思うなら戦場では血重するのじやーお主の所為で周り
の兵士までもが怯えてる」

「怯える？俺の様な奴に怯えるのなら戦場に出ても何も出来ないま
ま死ぬだけですよ、兵士の肝が座つていなければ俺の責任では無い
ように思ひますが？」

「貴様！さつきから聞いておればテオドラ皇女殿下になんと言ひ口
の聽き方だ！今すぐ「引っ込んで！…てめえは関係ねえだり…」
つ…」

口出して来た兵士に殺氣をぶつける

当初は出来なかつたが何度も命のやり取りをしてできる様になつた

のだ

テオドラには一切殺氣をぶつけていない
が、恐怖はしている筈だ

この能力は俺は操作出来ず常時起動しつ放しだ
まあ、操作出来たとしても起動しつ放しだが

それなのに此れだけ俺に向かつて来れるとはな
よく見れば少し震えている様にも見えるがそれを隠している
後ろの護衛を安心される為なのか俺に弱みを見せない為か其れとも
皇女の意地なのか
中々に微笑ましいな

・・・しかし、此れも

「何故其れほど頑に拒むのじゃ？訳が有るのじゃろう？話してはく
れんか？」

面倒臭くなつて來た

俺は護衛に全力で能力と殺氣をぶつける

護衛は全員涙と鼻水、涎、中には小便まで垂れ流して氣絶した

「ク力カ力カ力、人の家でお漏らしとは勘弁してもらいたい物ですな」

「な、なんじゃ？お主らどうしたのじゃ！？」

やはり人が恐怖する表情堪らんな

またもや顔が酷く歪む

テオドラは高々数人の護衛でここまで來たのだ

こいつらはかなり優秀な兵士なのだろう

俺が少しでもおかしな行動をしたら取り押さえられるレベルの奴らを
連れて來た筈だ

だからこそ、皇女サマは会話の主導権を自分が握っているつもりで話していた

しかし、そいつらが退場した今、主導権は簡単に俺に移った

「ク、クロコダイル！――」のもの達に何をしたのじゃ――？」

「なあに起きて困らると困るのでね」

「ど、どうこういひじゃ……ま、まさか妾を」

「ク力カカカカ、違いますよ、皇女殿ト。貴方様の聞こに答へよつと思いましてね」

「と、問いつ・・・そ、そひじや何故そひまで頑に抱むのじや――？」

「だから帝国の為ですよ」

「何度も言わすな――お主がやつてる事が兵」その兵が紅き翼が戦場に出てる事を知れば士気は下がりますよね、何故だと思っていますか？「な、なんじやと？」

「其れは自分達が勝てない事が奴らの今までの戦績からほぼ確定しているからですよ、十中八九紅き翼に殺される事がわかつて居るからです」

「その紅き翼を止めるのがお主の仕事じやひつ「そひです、だが紅き翼は俺を止められないだから今度は俺が連合の士気を下げる役目を負つてこるのでよ」な、なんじやと――？」

「戦場には紅き翼をも凌ぐ敵がいる、しかもそいつは背を向けて逃げる者ばかりか杖や剣を捨てて投降する兵まで殺してくる、これで

連合の兵の士氣はまだ下がりですな

「ク、クロコダイル。お主そこまで考えておつたのか。し、しかし連合の士氣が上がるかもしれんぞ？非道な輩を討てど、その時はどうあるつもつじや？」

「皇女殿下、人は自分で一番恐怖を抱いている相手には逆らえないものです。その証拠に俺が連合の兵を虐殺しても誰も止め様としません。止めたなら最後殺されるのが田に見えているからですよ。俺に殺される事を超える恐怖が無ければ向かっては来ないでしょう。つまり紅き翼には俺に向かつて来なければ俺より大きい恐怖に襲われる、だから向かつて来る訳です。そして結局は自身の事しか考えていない自称正義の魔法使いの馬鹿どもに俺を超える事など出来んでしょう」

「なつ……」

やれやれ俺も随分と口が回るな
まあ、間違いは言つてないだろ？

「ですので皇女殿下「テオドラで良い」……テオドラ様、俺にこの件は任せてくれますか？」

「許せクロコダイルよ。妾はお主を諂ひんでおつたのじゃ、じゃがこれからはお主を信じよつぞ」

「あつがとうござります」

やべえ、信じたよ「イツ

俺詐欺師に向いてんじゃね？

俺はそんな事を思いながら倒れている護衛の下の処理をどうしよう

か悩んでいた

【 sponge 30%】 皇女殿下、私は帝国の為に頑張つてこまわ《壁》（後

感想（ry

力の誇示（前書き）

風邪治りました
感想（ry

力の誇示

テオドラが国王陛下に説明してくれたのだろう
戦場での振る舞いに何も言つてこなくなつた

俺は戦場で思う存分人を殺すことが出来るようになつた
まあ今までだつて遠慮など微塵もしていなかつたがな

「クロコダイル、アリカ王女に失礼な態度を取るでないぞ」

「わかつてますつてテオドラ様、俺は黙つて辺りを警戒してればいいんでしょ?」

「なり良いのじゅ」

俺は今、テオドラの護衛として来ている

原作でアリカとテオドラが捕まつた時のイベントだ
今回も原作通りに進めていくつもりだ

ただ、1つだけ

完全なる世界の連中にすぐに捕まらずにある程度の戦闘を行わなくてはならない

奴らヒグルと思われず、自然に捕まらなければな

「お主がテオドラ第三王女か」

「そうじゅ、早速話を進めるとしようかの」

おつと考えている間に会談が始まつていたようだ
集中し過ぎて周りが見えなくなるのは悪い癖だな
ナギにもその所為で不意打ちを喰らつたんだしな

まあ今はそれよりもビのタイミングで投降するかだが

俺が限界まで戦うのはパスだ

連中のなかで霸氣を使う者が居れば死ぬかもしれん
まあ死ぬかもしれんがそれをこんな所で試す氣は起きない

逆にすぐに投降すればテオドリは俺に何か考えがあると思つてした
がつてくれるかもしれんが

アリカはどうだ？

間違いなく怪しむだろ？

こいつに怪しむれると後々めんどくさい

ならば連中が声を掛けて来るまで粘る場合は？

例えば「投降すれば一切手を出さない」的な事を向こうが言つて来
ればまだやり様があるだろ？

その為には向こうの連中が俺を殺すのは骨が折れると思わせれば良
いだろ？

しかしあまりにも圧倒的すぎるのも問題だ

向こうだつてよっぽどのバカでない限り自分たちを余裕で倒す」と
が出来る奴に投降しようとは言わないだろ？

なので一応疲れたふりでもしておこう

そうすれば向こうもその事を伝えやすくなるだろ？

そんなことを考えていたらどうやら奴らもやって来たようだ

「テオドラ様、俺の後ろから離れずにお願ひします」

「？何を突然？」

「奴さんにこの場所がばれていたようですね」

「何じやとー？」

俺以外の誰も気づいていなかつたようだ
アリカの護衛の奴らも驚いている

その反応を見て楽しんでいるとその護衛の内1人が消し飛んだ
おそらく魔法の射手だらうか
魔法に関しては畠違いだから何も解らない

「砂漠の宝刀！！」

俺は突然のことで驚いている奴らを尻目に魔法を放った者に攻撃した
足が切断され、支えを失つたからだが地面上に落ちる

向こうの奴らも突然のことで驚いているようだ

足を落とされた奴もあまりの恐怖で豚のような悲鳴を上げている

「さあどうした？まだ足が2本ちぎれただけだぞ、かかってこい」

「どうした！？後ろの奴らも撃つてこい！！」

「さあ、夜はこれからだ！！お楽しみはこれからだ！！」

「Hurry!Hurry hurry!!Hurry hurry
y hurry!!！」

やべえ、夜じゃないのに夜つて言つちやつた
そんな事を思いながら俺の猛攻が始まった

力の誇示（後書き）

作者はhelsing大好きです

何故じゃ、何故あ奴は（前書き）

感想（ry

何故じや、何故あ奴は

- テオドラ side -

アリカ王女と会談している時に
突然クロコダイルが声を掛けってきた
「テオドラ様、私の後ろから離れずにお願いします」

「? 何を突然?」

辺りに敵などおらんじやろ?'

するとアリカの護衛一人の上半身が無くなつた
その方向を見やると魔法を放つたと思われる奴らが居た
「砂漠の宝刀!...」

杖を構えていた奴の足が切断された
やつたのはもちろんクロコダイルだ

その者は甲高い声をあげて泣き叫ぶ
後ろに居る者たちも顔が恐怖で歪んでいる

「さあどうした?まだ足が2本ちぎれただけだぞ。かかってこい」

「どうした!...後ろの奴らも撃つてこい!...」

「さあ、夜はこれからだ!...お楽しみはこれからだ!...」

「Hurry!Hurry hurry!!Hurry hurry
y hurry!...」

クロコ「ダイルの戦闘を見るのは初めてだ
想像していた以上に恐ろしい
しかし、それよりもクロコダイルの言動が気になる

足が千切れただけ？夜はこれから？

一体何を言つておるのじゃ？

戦場で、この場で足が千切れる戦意を失つて当然のことじゃ、死んだも当然のことじゃろ？

それなのにまだ掛かつて来いとな？それはあまりに惨過すぎる

クロコ「ダイルが言つ夜とは？

今の時刻から考えて本来の意味ではないのじゃろ？
ならどういう意味か？この殺戮が行われている凄惨な状況で夜はこれからと言つておるのじゃ

つまりはどうじつとか？

人が殺されるこの場がクロコ「ダイルにとつて夜といふことなのじゃ
ろ？

あ奴が見ている光景は妾にはわからないのじゃ

紅き翼を倒せるほどの人物が何故今まで無名だったのか？

あの年齢とは明らかに合わない風格は？

倍以上の年齢の兵士を氣絶させるほどの殺氣、何故そんなものが出来るのか？

戦場での虐殺を止めると言つたあの時、クロコ「ダイルが連合の兵士に自分への恐怖を植え付けて帝国の有利に戦争を進めようとしている

る」とが判ったあの時、そんなことをすれば連合から田の敵にされるじやうつ

それなのに奴はその事を一切考えていな「うつに自分の計画を話した奴のことはほとんど知らんし、わからんが恐らくは自分の事などどうでもいい」と思っているのだろう

何故そのような考え方がある?

何故そんなに帝国の為に死んでくれる?

ひょっとしたら恐怖の話は自身の体験談なのか?

どのような生じ立ち、生活をすれば奴のようになるのじやうつ?

きっと王族である妾には想像もつかない凄惨な生活を過ごしてきたのじやうつ

何人も何人も殺してきたのじやうつ

しかし妾は軽蔑などせんぞ

いつかお主が心を開いて自分の生じ立ちを話してくれることを願つておる

誇り高き皇女は願つ

目の前で嗤いながら敵を殺す自分の最も信頼する部下がいつの田か自分に心を開いてくれることを

何故じや、何故あ奴は（後書き）

お気に入り登録がめっちゃ増えてて焦ったw
タイトルを
勘違い乙
にしようか
凄惨な過去を持つ男（笑）
にしようか迷った

完全なる世界の奴らを相手にある程度有利に見えるよう、疲れて
きているふりをしながら立ち回っていた
アリカの護衛も最初は頑張っていたがあまりにも長く戦闘が続くの
で気を抜いてやられてしまった

しばらくはその状態が継ぐ居ていたが、
向こうの奴らもアリカの護衛と同じ様に死んでいく奴が増えてきて
いるのが判り、
これ以上は不毛と判断した上で俺が望んでいた通りの話が持ちかけられた

もちろんそれに乗っかるつもりだったが問題はアリカだ
俺はアリカを説得しようと思ったがその必要はなかつた
疲れたふりをしながら戦っていたのが完全なる世界だけではなくこ
ちら側にも影響していたのだ

つまりだ、どうこうとかといつと
「もう充分じゃクロノダイル、こちらの安全は保障されるのならば
何の問題もなかろう」

というテオドラ皇女殿下のありがたいお言葉を頂いたのだ

アリカもその意見に同意

お前が疲れを隠しながら頑張っているのは判っている、もう充分だ
的な男前な事を言い出してこの場は投降することが決まった

・・・疲れを隠すつもりなんてなかつたんだが、俺はよつほど疲れている演技が下手なんだな
全然関係ないことを思いながら奴らの「い」に従つた

-ナギ side -

隈にはめられ連合からも帝国からも
追われる身となつた俺達は辺境を転戦
古代遺跡立ち並ぶ夜の迷宮へアリカ姫救出に向かつた

「よお、来たぜ姫さん」

「遅いぞ我が騎士」

「お？ やつとお迎えか」

そこには何故かクロコダイルが居た
「なんで此処にてめえがいんだよ？」

「奴さん数が多くてな、キリがないから投降することになつたのよ」

そんなことを言いながら奴は自分にだけ付けられている手錠を手首の部分を砂にすることで外した

「おいいいい！ 外せるのになんて逃げなかつたんだ！？」

詠春の「い」とは最もだらつ

「俺も結構疲れてな、そんな状態で2人連れて逃げるなんて無理だつたんだ。それにアリカ王女がお前らが迎えに来るつて言い続けてたんでな、待つことにしたんだ」

そんなこんなで俺達は紅き翼の隠れ家へと着いた

「何だこれが噂の『紅き翼』の秘密基地か！どんな所かと思えば・・・
掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に向期待してたんだ！」のジャコはよ

「何だ貴様、無礼であろう！」

「くつへへん、クラスの皇族に貸しあつても借りはないんでね」

「何い？ 貴様何者だ、クロマーダイル！」

「何でじょうテオドラ様？」

「！」の無礼な男を懲らしめてやるのじゃ

「！」のじゅじゅ馬一そこつは卑怯だらうが！

「Yes - my master」

「マジかよー！」こつてあの渴きの王だらう？・・・

「渴きの王？ 何だそれは？」

「なんとも厨一臭いー！ つねだな
「お主の！」か、渴きと砂の王と辱ばれてるのじゅ

「ん？ 厨一臭いって何だ？」

「いや、いひひの話だ」

「我が騎士よ

「だあ、り、その我が騎士つて何だよ姫さんクラスで言つたら俺は魔
法使いだぜ?」

ハズかしーな

それにしてラカンめ、抜け駆けしやがつて
俺もクロコダイルと勝負したいのに
「もつ連合の兵じやないのじやろ、ならまほ主まほせや私のものじや

「な・・」

「連合に帝国・・」

「そして我がオステイア」

「世界全てが我らの敵といふ訳じやな」

「じやが・・主と主の『紅き翼』は無敵なのじやん?」

「ん?ムテキ?」

「余所見とはいひ度胸だ筋肉ダルマ!」

「ちよ、タイムタイム！」

「・・・・・世界がすべて敵 良いではないか、こちらの兵はたつたの8人、だが最強の8人じゃ」

「ならば我らが世界を救おう、我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ」

だから俺は魔法使いだつづーのに・・

「・・・へ、やれやれ相変わらずおつかねえ姫さんだぜ、いいぜ俺の杖と翼あんたに預けよう」

「うして俺達は世界をすべて相手に反撃を開始した

117名（後書き）

いやー、此処のシーン書くために久しぶりに原作読んだんですが今までつる覚えで書いてたから所々間違ってる部分がありました原作読みながら修正していきたいと思います

戦争の後に（前書き）

感想（ry

「あー、暇だー」

「暇だな

今、俺はナギとラカンと三人で居る
俺たちは頭脳労働担当が敵と判断した奴らを襲撃してつぶす役目を
負っている

今これだけ暇なのはその判断を貰うのを待っているからだ
俺としてはそつちが良かったのだがテオドラ曰く

『お主は今まで頑張つて、いや頑張りすぎたのじや、大丈夫じや皆
まで言つた妾は全て解つておる。妾もそんなお主にこれ以上田の前
の相手に敵か味方が疑わせたくないのじや』

との事

一体何の話なのかさっぱりわからんが皇女殿下がそこまで言つのだ
従つておくことにしたのだ

「おいおい、幾らなんでもテメエらダレ過ぎじゃねえの？」

「暇なもんは暇なんだよ、仕方ねーだろ」

「次はお前が話題振れよクロコダイル、俺たちは色々暇つぶしの提
案とか出したぜ」

「ラカン、提案つつてもお前らが言い出したのつてじりとじりとかじ
やねえか。しかもそれに最初に飽きたのもテメエらだらうが」

「だつてお前強いんだもんよー、どんだけ語呂豊富なんだよ

生前友達なんて居なかつたから一人でじつとつしてたりしたんだよ
・・・悲しくなつてきた

「せひ、せひあと話題プリーズ」

「つたくづせえ、だつたらお前じの戦争終わつたらビリすんだ?」

「そんなんの考えてねえよ、お前は?」

「俺もナギと同じだ」

「・・・話題振つた意味がねえじやねえか

「いや、お前は話してないだろ」

「わうだよ、お前言いだしつべなんだから言えよな

やべえ、こいつらすげえムカつくわ

「わかつたよ、なら言つてやる。俺はな旧世界で何かしらの活動するつもりだ」

「旧世界で? なんでだよ?」

「じつちで英雄氣取るのも良いがな、俺はちよつとした夢が有つて
な

「その夢つて何なんだ?」

夢つて言つてしまつたが

ただ単に生前には無かつた力で自分がどこまでやれるか試すつもりなだけだが

「・・・昔は何も出来なかつたんだ」

「世間に散々忌み嫌われてきたんだよ、家族にもだ。なに珍しいことじゅねえ、どこにでも有る大したことない理由だよ」

ヨタクつてだけで虚められて生きてきたんだ

カツアゲどころじゅねえ、殴られるなんて日常茶飯事だった先生に言つても解決せずに卒業するまでそれは止まなかつた

「それが今はどうだ？あろう事か紅き翼にも並ぶ砂の王だぜ？昔は出来なかつたことがたくさんあつた、だが今はそれが出来るんじやないかつて気に成るんだよ」

今度は俺が踏みにじる立場に

「・・・」

俺の話を2人は黙つて聞いていた

垣間見える闇（前書き）

感想（ry

・ラカン side -

「旧世界? なんでだよ?」

ナギが尋ねる

そりや そうだ

帝国の英雄が旧世界で何をするんだ?

「いっつちで英雄気取るのも良いがな、俺はちょっとした夢が有つてな」

「その夢つて何なんだ?」

俺も気になつて尋ねた

あらゆる戦場で強いながら兵士を惨殺し続ける男の夢だ
気にもなるだろ?」

クロコダイルは少しの間考えるそぶりを見せ、やがて

「・・・昔は何も出来なかつたんだ」

男の告白が始まった

「世間に散々忌み嫌われてきたんだよ、暴力など当たり前、だれも止めようとせず、家族には嫌悪する事を隠そともせずに俺をゴミのよう扱つた。なに珍しいことじやねえよ。ビリにこでも有る大したことない理由でだ」

家族にも嫌われる

相当な事にも思える

が、この男は珍しい」とではないと言い放った

それにして大したことない理由でこいつに暴力を振るつ
そんな事をすればこいつなら間違なく殺すと思うが
こいつはそれをしたならばそこで収まつていただろう
それをしなかつた

俺は2つの可能性が思い浮かんだ

1つはこいつがその頃はまともだつた

もう1つはその頃には反則ともいえる能力が無かつた

あるいは両方か

俺は考えた

もし、あの能力が先天的な能力ではないとすれば・・・

「それが今はどうだ？あろう事か紅き翼にも並ぶ砂の王だぜ？昔は
出来なかつたことがたくさんあつた、だが今はそれが出来るんじや
ないかつて氣に成るんだよ」

こいつは一体どんな闇を抱えているというんだ

葉巻に火を付けながら話を続ける友人に俺は一体何が出来るのか？

感想（ry）

- Nagi side -

クロコダイルの話が終わつた後しばらくしてジャックが俺を外に連れ出した

「急にどうしたんだ？」

「ナギ、あいつの話ビビり思つた？」

「クロコダイルのか？ そつだな・・・あいつに暴力振るうなんてよっぽど度胸が据わつた奴らなんだな」

そつ答えるジャックは呆れ顔で

「だからお前はガキなんだ」

「何だと？」

「いいか？ 考えてみろ？ 暴力を振るわれてもそれを上回る力を見せつければそれで収まつていた。だが奴はそれをしなかつた」

確かにあいつだつたら殺して終わりのよつた氣がするけど話はそれで終わつていなかつた

「何か理由があるのか？」

「ああ、俺は2つほど考えている」

「一つはクロコダイルがその頃はまともだった

「もう一つはその頃にはあの反則ともいえる能力が無かつた

「あるいは両方か

「俺はまともなあいつが思い浮かばないんだが? 一つは無いんじやないか?」

少しばかりふざけて答える

「いや、俺は一つ田と二つ田の両方だと考えてる」

「なんでそういう考えるんだ? 理由があるんだろ?」

「ああ、あいつは悪いが俺はクロコダイルほどじ怪んだ性格が元々
だつたとは考えられない。あいつの怪み具合は尋常じやねえ、もは
や異常だ」

・・・確かに言われてみればそうだ

「口ではかるく言つてはいるが実際は俺らが想像も出来ないような生
活を送つてきたんだろ?」

「そして2つ目だが俺はあんなバケモンじみた能力が先天的な物と
は思えねえ、それにあいつは『暴力など当たり前』と言つたんだ」

「つまりだ、あいつはその時はまだ能力を手にしていなかった

「なぜならあの能力があれば暴力を振るおつとも躊躇られないしな

「なるほど」

そうだった

あの能力には攻撃が効かないんだった

その時に能力があつたらあいつがあれだけ歪む事は無かつたんだ

「なら一体どうやってあんな能力を?」

「その答えは」の間テオドラに聞いたあの話がヒントになる」

「あの話つて・・・クロコダイルが連合の兵士を見せしめのようて殺す理由か?」

「そうだ、俺はあいつが連合に恨みを持つていると推測する」

「?話が見えねえんだが?」

「それを踏まえて俺はクロコダイルの能力は連合に属する何らかの組織に人体実験をされた結果だと考える」

「そんな・・・」

声が思うように出なかつた

そんなことはない!

そう断言したかつた

だが、無理だつた

なぜならこの戦争で色々な人間の黒い部分を見てきたんだ
あり得ない話ではない

それに

「・・・辻褄が合つた」

クロコダイルの過去、能力の真実がわかつてしまつた
「出来る事なら知りたくなかったぜ」

「ああ、俺もだ。出来る事なら奴の口から聞いたかった」

だがそれは無理だろう

それだけの事をされてきたんだ
人を信用できないだろう

「あいつの、クロコダイルの家族の奴らはなんで止めてやらなかつたんだ！…」

ジャックの悲痛な叫びが響く

「おそらくそいつらがその組織に引き渡したんだろう」

俺は自分でも驚くほど冷静に分析する

心の奥でどす黒いものが渦巻く

「畜生、畜生、こんな、こんな事があつて良いのかよ。あいつが、
クロコダイルがあまりにも・・・」

ジャックが目に涙をためている

目の前で大の大人が泣きかけている

しかし、俺はそれを馬鹿にする事が出来なかつた

「ジャック、俺たちがあいつを支えてやるうじやないか」

「ああ！当たり前だ、仲間として、友人としてあいつが心から笑える為に！…」

なあクロコダイル

もつと俺たちを頼つてくれ

お前はどう思つてゐるのかしらねエが

俺たちはお前を友達だと思つてゐるや

迷推理（後書き）

「ラカン「証明亮」（ドヤッ

「うかせうべだ（謹慎也）」

感想（ry

「いかはばつぐんだ

下部組織を散々潰して回ったのち遂に敵の本拠地が墓守り人の宮殿である事を突き止めた

俺は知つてたから特に何とも思わなかつたが

「不気味なぐらい静かだな奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊準備完了しました」

「おお」「

ナギたちはすでに戦闘準備を整えたようだ

俺は葉巻を吸いながら墓守り人の宮殿を眺めている

すると隣にラカンがやってきた

「なんだ？お前も吸いたいのか？」

「ああ、もううぜ」

俺は葉巻を取り出し、キヤップを噛み千切つた
そして火を付けラカンに手渡す

それを吸つて一言

「なあ、クロ」「ダイル」

「なんだ？」

俺はラカンの方へ顔を向ける

後ろではナギがサインを強請られていた

「今まで色々あったが、俺に出来る事があつたら何でも言つてくれ
や

「は？ いきなり何言つてんだ？」

マジで何言つてんだこいつ

その時ナギが俺たちに集合の命令を掛けた

「ダチとしていつでも力になつてやるつて事だ、俺はそろそろ行く
ぜ」

・・・あいつ今なんつった？

ダチ？

友達つてことだよな？

この俺と？

俺なんかと友達になつても楽しくないだひつこ

何企んでんだ？

俺と友人になつた場合のラカンのメリットを考えながらナギの命令に従い集合する

「よおしつ野郎ども、行くぜつーーー！」

「やあ『千の呪文の男』また会ったね、これで何度目だい？『渴きの王』は初めてだね、僕達もこの半年で君達に随分数を減らされてしまったよ、この辺りでケリにしよう」

人形が何か言っているが耳に入らない

冷汗が止まらん

今、俺はどんな顔をしているのだろうか

人形の周りに居る4人をもう一度見る

火を纏っている者

雷を纏っている者

フードを深く被っている者

そして、

足もとから水を召喚し、飛沫を撒き散らしている者

・・・・・援護に回る

- フェイト side -

こいつらは強い

かなりの使い手をそろえた此方がかなり押されている
その上渴きの王が上手いこと援護に回つて・・・・・・・・・・援護だ
と?

何故奴が援護に回つているんだ?

情報によれば渴きの王はバリバリの前線タイプだつたはず
実際奴の援護はこちらとしてもかなり恐ろしいが味方にも当たりそ
うだ

慣れないと援護を何故?

その時視界の隅で飛び散った水飛沫を捉えた
それを避ける渴きの王

どうも仲間の戦闘よりも飛び散る水飛沫に目が行つてゐるよつて見
える

なるほど”渴き”の王か
なかなかに良い一つねじやないか

「『渴きの王』を狙え!! 奴は水が弱点だ!!」

それを聞いた渴きの王はまるでこの世の終わりのような顔をしてい
た

うひかまやつぐさだ（後書き）

今回も短くてすこません

トマトの新規（温帯地）

感想（トマト）

- ラカンドラ -

「『『渴きの王』は水が弱点だ！』

戦闘の最中に聞こえた声

「は？」

俺たちは皆一瞬呆けた

ただ一人クロコダイルを除いて

あいつの顔は文字通り蒼白になつてこれから自身に降りかかる」と
を想像し、恐怖している

この反応を見る限りガチだ

「どきやがれ！…」

俺は水使いの奴を倒そうとするが周りの奴らに阻まれる
周りを見るがナギ達も同じ状況のようだ

今、こいつらは俺たちを倒そうとはせず、水使いがクロコダイルを
倒すまでの時間稼ぎをしている

畜生！

こういうのが一番厄介なんだ！

そうしている間に水使いが水をすさまじい勢いで弾き出し、それが

クロコダイルに向かっていく

「クロコダイル！」

呼びかけたことでやつと我に返り

今の自身の状況も把握したようだ

「糞が……最硬絶対防御・守鶴の盾……！」

クロコダイルが狸のような姿をした物を自分の体と水の間に作り出す物々し過ぎる技の名前からして自身が出来る最大の防御なのだろうしかし、それもやはり砂で出来た物だったようで、瞬く間に泥になり、水はその泥と共にクロコダイルにぶち当たった

「お前らよくもクロコダイルを……！」

ナギの声と同時に俺たちは反撃を開始した

仲間をやられて怒り心頭な俺たちは奴らをあつといつ間に倒し、ナギは逃げるアーヴィングルンクスに追つて行つた

「おい……しつかりしろ……！」

俺はずぶ濡れで倒れているクロコダイルに声を掛ける

「……あー、良かつた。俺生きてるわ」

「つたぐ、ビビりせやがつて」

遠目で見ていた詠春達も安心したようだ

「スマン、あの技は本来硬度が高い鉱石を圧縮して盾にする技なんだ、その環境さえあれば何とかなつたかもしれん。まああれを出したお陰で泥がクッショーンになつたから助かつたんだが」

「そんな技あの一瞬で出せるわけねーだろ、あーもういい心配して損した。ほら、ナギの所に行くぞ」

俺はこいつを起こしてナギの所に向かつた

ナギ達の所にたどり着いた時にはナギが奴を宙吊りにしていた
「フ・・フフフ・・まさか君はいまだに僕が全ての黒幕だと思つて
いるのかい？」

「なん・・だと」

その瞬間

奴ごとナギを何かが貫いた

「！？」

「ナ、ナギイツ！-！」

「誰だ！？」

敵を視認した瞬間

またもやそれが放たれた

「いかんッ 最強防御！-！」

「ぬうううーー！」

ゼクトと俺が止めようとする
が、ゼクトの防御が破れ

俺は両腕が弾け飛んだ

俺が吹き飛ばされながら見たのは

「なつ……」

俺より遅れてやつてきたクロコダイルが避けられずに巻き込まれる光景だった

「ぐつ・・バカな・・

「まさか・・アレは・・」

そいつの姿を見て思つた
こいつには絶対に敵わないと

side out

「待てコラでめえつ！……」

「任せなジャック」

「い・・いけませんナギーその身体では」

周りで声が聞こえる

ラカンの言つ通りに素直に着いて来たのが間違いだった

俺のバカが！

高々水と泥浴びたぐらいで造物主の事忘れるなんて
いや、今は早く起きねえと

造物主倒してもつともつと名を上げなければ

——痛——！——

かなりの激痛が走った

もう一度起き上がりうとして気づいた

今までの体とは何かが決定的に違ひ、どう

恐る恐る、其の痛みが走り続ける部位を見てみると

左
宛
が
え

肘より少し先からが消えている

それを見た所為なのか

それとも叫んだ所為なのか

先程よりも大きくて鋭い痛みが体を駆け巡った

「クロコダイル！？そこに居……ツツ！あなた腕が！！」

もはや自分の声すらも聞こえない

俺は気を失つた

下記の如きが後書きである。

キタ

繋がつた勘違い

「知らない天井だ」

「お？ 起きたか」

そこには筋肉、ダルマが居た

「ここは？ 確か左手が消し飛んで」

左手を見るが、手首辺りから先が何も無かつた

「病院だ」

「そうか、あの後どうなった？」

「お前が気絶した後の話だがな、造物主は倒しただが、ゼクトが・・・

「

「そうか、死んだか」

原作通りに進んだか

「そうだがお前落ち着きすぎじゃないか？」

「いや、流石にもう泣き叫んだりはしないだろう、それに前にもつと酷い事になつたんだし

なにせ一度死んでるからな

トラックに撥ねられて地面に叩きつけられたんだ

左手が無くなつたのはとても痛かつた

この体で初めてもらつた攻撃
でも今叫ぶ事は無い
もう落ち着いた

「てめえはそれで良いのか？」

「ああ？ なにが言いてえんだ？」

いきなり何なんだ？

「感情無理矢理押さえ込んでんじやねえって事だ」

「何を言つて・・・」

「本当に納得してゐるのか？」

納得・・・

出来る筈がねえ

自分の四肢の内の一つが消し飛んだんだからな
確かに無理矢理納得しようとしていた

だが

「ラカン、てめえ何様のつもりだ？ 今回の事でも結局何も失つてい
ないお前には言われたくねえんだよ！」

テーブルに左腕を叩きつけて怒鳴る
そうだ、こいつは確かに腕を失つた
だが、今は既に元にもどつている

そんな奴に俺の気持ちが解るものか！

「言つただろう、俺はお前のダチだ」

「は？」

一瞬何を言われたのかわからなかつた

「確かに俺はお前が言うように今まで何も失つてなんかいなかもない、お前の人生を理解することは出来ない。だからと言つてダチが苦しんでるのは理解できないわけじゃない！今まで一人で過ごしてきた事は知つてゐる、だが今は俺がいる！俺たちがいる！！お前が俺をどう思つてゐるのかは解らないが俺はお前の事をダチだと思つてゐる。」

「お前は何を言つて……」

心の奥で何かがせり上がつて来るのを感じる
それを必死に押さえ込む

「つまりだ、何が言いたいかと言つてだな

「そ、それ以上言……」

今まで一人で孤高を氣取つて生きてきた
虐めから、孤独から自分を守り通して生きてきた
自分に嘘をつき続けていたら
いつの日か本當になると信じて
今まで積み上げてきた偽りの強さ
それが、

「俺を頼れ、ダチに頼りにされてんだ幾らでも手え貸してやる」

この一言で崩壊した

心の底からせり上がつてきたのは涙だった

「あ、ああ

一人は嫌だった

一人ぼつちは寂しかつた

昔は相手を平伏させる力なんて望んでなかつた

ただの一人だけでもいい

愚痴を聞いてくれる

電車の待ち時間メールの相手をしてくれる

虐めを庇つてもらわなくとも良い

休日に遊ぶ約束を立ててキチンと待ち合わせ場所に来てくれる友人が欲しかつただけなんだ

「悩みがあれば俺に言え俺も一緒に悩んでやる、楽しい事があれば俺も誘えもつと楽しくしてやる、大丈夫だ。何があつても俺だけはお前の友達だから」

ラカンはそう言つて俺を抱き締めた

涙や鼻水が付くのも厭わずに

人生一度目にして初めて出来た友達

普段から筋肉ダルマと罵つてきたウザい奴

そんな筋肉ダルマは格好良すぎた

そしてその生き方は俺には眩し過ぎた

・ラカン side -

「知らない天井だ」

「お？ 起きたか」

クロコダイルが目を覚ました

「ここは？ 確か左手が消し飛んで・・・」

俺も釣られて左手を見るが、手首辺りから先が何も無かつた

「ここは病室だ」

「そりゃ、あの後どうなった？」

俺は意を決して言った

「お前が気絶した後の話だがな、造物主は倒しただが、ゼクトが・・・」

「

ゼクトはこいつの過去の事を俺とナギから聞いてからこいつの事をかなり気にかけていた

クロコダイルもゼクトには心を開いていたように見えた

そんな相手が死んだ

こいつを襲う精神的苦痛はどれ程のものなのだろうか・・・

だが、こいつは有ろう事か

「そうか、死んだか」

まるでゼクトが自分とはまったく関係のない存在のような返答をした

俺はたまらず聞き返す

「そりだがあ前落ち着きすぎじゃないか?」

こいつはクールな奴だがこれほどまでに冷たかったのか

俺は友人になりたいと思って居た相手の評価を下方修正した

その時クロコ・ダイルが口を開いた

「いや、流石にもう泣き叫んだりはしないだろう、それに前にもつ
と酷い事になつたんだし」

一瞬何を言われたのか解らなかつた

クロコダイルの価値観、それは自分ではとても理解することが出来
ないものだと改めて知つた

自分の友が、仲間が還らぬ人となる事に流石にもう慣れたと言つ
まるで子どもが注射の痛みに慣れたとでも言うように

俺では想像もつかない人生を過ごしている
ナギにはそう言つた

帯びる雰囲気そのものが変わつてしまつほどの虐め、家族に売り飛
ばされその先で人体実験
想像できないほど酷い人生

されど理解することは出来る

嘗てこの身は奴隸でそれなりに波乱を経験してきたのだから

そう思つていた

自分ならこの青年に救いの手を差し伸べてやれると

だが、自分は本当の世界の闇というものを知らないのだと知った
奴隸という地位を経験したのだから苦労人同士お互いを解り合える
そんな風に思つていた自分が恥ずかしい

友人の死を何度も、慣れるほどに経験したばかりかもつと酷い事までも体験した

それよりも酷い事とは一体・・・

正に想像もつかない人生

もはや心が折れそうだ

だか解つた事もあつた

「てめえはそれで良いのか?」

「ああ?なにが書いてえんだ?」

想像出来ない様な人生

ナギにそう言つたが他人の人生なんて想像出来る訳ねえ

他人の人生談聞いてそいつが今まで過ごしてきた人生を知る事が出来てもその人生を完璧に理解なんて出来ない

そいつとは自分とは価値観も何もかも違う所詮他人だからだ

でもその話を聞いてその時にそいつが何を思ったか想像は出来る

これは想像だが

「感情無理矢理押さえ込んでんじゃねえのか?」

「何を言つて・・・」

「本当に納得してるのでか？」

納得出来る筈がねえよ
仲間が死んだんだから

確かに俺も無理矢理納得しようとした
英雄になった俺たちが悲しんでばかり居るなんて事はゼクトは望んでいない

そう思っていた

だが納得出来なかつた

もつとあいつと馬鹿やつてればよかつた、もつと色々話しておけば良かつた、こんなに急に居なくなるなんて思つて居なかつた
そう考へてしまふ自分が居る

「ラカン、てめえ何様のつもりだ？今回の事でも結局何も失っていないお前には言われたくなえんだよ！」

クロコダイルが叫ぶ

何も失っていない

その言葉が一体どんな意味を持っているのか、どんな思いが籠められているのか

放つた言葉は深すぎて理解できない

相手に理解させるつもりが有るのだろうか
そう思つてしまつほどに脈絡のない言葉

だから御相子だろう

俺も脈絡なく自分の思いを叫ぶ

「言つただろう、俺はお前のダチだ」

「は？」「

流石に脈絡が無さ過ぎたのだろうか

だがクロコダイル、お前の言葉も同じようなものだったんだぜ

せめて意味だけは伝えないとな

「確かに俺はお前が言うように今まで何も失ってなんかないかも
しない、お前の人生を理解することは出来ない。だからと言って
ダチが苦しんでるのは理解できないわけじゃない！今まで一人で過
ごしてきた事は知っている、だが今は俺がいる！俺たちがいる！！
お前が俺をどう思っているのかは解らないが俺はお前の事をダチだ
と思つていてる。」

「お前は何を言つて……」

心の奥で何かがせり上がつて来るのを感じる
それを一字一句違わずに伝える

「つまりだ、何が言いたいかと言つてだな

「そ、それ以上言……」

今まで一人で生きてきた

どんな事に対しても心を強く持つて生きてきた
虐めから、孤独から自分を守り通して生きてきた
今まで耐え忍んで生きてきて
流石に我慢しそぎたのだろう

心の奥底に押し込んだ感情
それを呼び戻せると信じて

「俺を頼れ、ダチに頼りにされてんだ幾らでも手え貸してやる」

「あ、あああ

俺は目の前の友人を力一杯抱き締めた

「悩みがあれば俺に言え俺も一緒に悩んでやる、楽しい事があれば
俺も誘えもつと楽しくしてやる、大丈夫だ。何があつても俺だけは

お前の友達だから

普段ならすり抜けるその体
しかし触れることが出来た
病室には嗚咽が響き続けた

繋がつた勘違い（後書き）

主人公心を開くの巻ですね

ラカンと論点ずれてる時点で屑ですね

当初からラカンに友人ポジションに就いてもう予定だったの
で感想に

主人公が簡単に心を開いて真人間に成るような展開は止めて欲しい
というのが在つて非常に焦りました

個人的にも良い子ちゃんは書きたくないし

これだけ歪んだ主人公が真人間に戻ることは不可能だと思つて
いたので真人間云々は問題無かつたのですが

簡単にという部分でハードルがかなり上がりました。ｗｗ

ひょつとしたら主人公が誰とも一切慣れ合わずに過ごすことを希望
されていたのかもしれません、すいませんその展開は無理です

まあ、なんにせよ今回の話は自分でも結構良いんじゃね？って思つ
ています

外道成分大嫌い、原作キャラハーレム以外の展開は認めない、もは
や原作以外認めんつていう読者様はいらっしゃらないとは思いますが、もしいらつしやるならこの辺でハッピーエンドされることをお
勧めします

話変わりますが次の更新は遅くなると思います

最近忙しくなつてきて何時になるかは判りませんが出来るだけ早く
更新するつもりですのでどうかご勘弁を

血葉の意味を帯びて語る（前輪也）

おじいて中々執筆できませんでした

言葉の意味を考えて話そう

あの後、退院して直ぐに帝国で式典が行われその場で騎士の称号を貰いサー・クロ「ダイルと名乗ることになった

そして今はテオドラが褒美をくれると喜びのドテオドラの私室に居る

「妾の騎士クロ「ダイル、お主何か欲しい物はあるかの？」

欲しい物ねえ

特に思いつかないな

ヘラスの王族に入ってくれとかは駄目だらうか

・・・駄目だらうな

金と言つのが一番無難だらうか
ふと左腕を見た

・テオドラ side -

珍しく悩んでおるの

強欲なクロ「ダイルの事だから金と即答するのかと思つていたが

・・・まさか王族に入れろなどとは言わんじやんうな

いや、妾としてはその時期早々といつか
心の準備がまだといふか

そもそも王族といつ地位が欲しいだけであつて、妾の事など微塵も
興味ないのかもしれん

だつたら仮契約位で一旦満足させて置いてそれから真意を図るとい
うのも . . .

. . . 駄目じや、此奴がそんな事で騙されるとは思えないし、それ
に地位担当でだつたとしても別に . . .

「テオドラ様、宜しいですか？」

「あ、ああ良いぞ申してみよ」

わ、妾は何を考えておるのじや
クロコダイルがそんなこと言つはずがないのに

「義手と言いますか鉤爪が欲しいのですよ」

「義手？鉤爪とな？」

義手なら判るが鉤爪？

「ええ、今この身は騎士なので失つた左腕の分の攻撃する手段が欲
しくて、デザインは既に考へてゐるので」

自分への褒美に仕事の道具を頼むとは

妾はクロコダイルの事を少々勘違つておつたよじや

「成る程、判つたのじゃ」

「有難ひいります」

強欲と思つて込んでしまつてはいた自分が恥ずかしい

「妾は王族に入れてくれとでも言つのかと迷つてひやひやしたが」

「俺もそれは流石に駄目だらうと想い重ishしたよ、わざわざも言つた様にテザインは決めているんでその通りにお願いします。ではこの辺でお暇をもて貰こまゆ」

そつ言つてクロコダイルは出て行つた

．．え？

自重した？

本当は王族に成りたかった？

頭の中であつたあの葉が反芻される

「ク、クロコダイルの事じやかう。あつと地位に違ひないの
じや」

彼奴は強欲だから

「 そう言いかけて先程クロコダイルが強欲といつ評価を修正した事を
思い出す 」

「 いや、彼奴は意外と誠実な男だったのじゃ。
え、じゃあまさか本当に? 」

頭が混乱する

思考の堂々巡りが続き答えが出ない

だ、誰かに相談しなければ
こんな事相談出来るのは妾より奴を知っているあの男だけ

「 ジャックを、ジャック=ラカンを呼ぶのじゃ――! 」

じゃじゃ馬姫の叫びが宮殿に響いた

言葉の意味を考えて話そう（後書き）

フラグが立ちましたね

主人公は自分が発した言葉の意味が判つていません

次の更新ですが夏休みくらいになるかと

全てには此處から始まつた（前書き）

感想等（　　）

全ては此処から始まつた

俺は人を探している

正義云々で動く様な奴ではなく
それなりに強い

金で動く人物で

それなりに信用出来そうな奴
いやまあ、信用出来るかどうかなんて正直会つて見ないとわからんが
だが原作の中でそれっぽい奴はいた
「それがお前だカゲタロウ！」

「 . . . は？」

-カゲタロウ side -

酒場でいきなり声を掛けられ驚いた

それも相手はあのサー・クロコダイルだ
取り敢えず口を開こうとすると

「詳しい話をするから着いて来い」

と鈍く光る鉤爪を突き付けられ有無を言わさず連れられた

道中に何を言つても

「詳しい話は後だと言つただろ」

と鉤爪を押し付けてくる

観念して大人しく着いて行くと一軒のそれなりに大きい家に着いた
聞けばこいつの家だという

「ああ入れ」

入つては駄目だと判つてはいる

しかしだ、こいつからは逆らえない雰囲気を感じる
何というか恐いのだ

このまま此処にいてもこいつの機嫌が悪くなるだけと判つてはいるか
ら大人しく入ることにした

「さあ、此処まで着いて来たんだ。説明してくれ」

「ああ、俺と一緒に旧世界に行くぞ」

まるで決定事項の様に話す

だがそこは一先ず置いておくとして

「旧世界? 何故だ? というより俺とあんたは初対面の筈だよな?」

「旧世界で俺は自分がどこまでやれるか試したいからだ。そして俺
とお前は初対面だ」

自分を試すだと?

そんな事なら

「他の奴でも良いだろ? サー・クロウ・ダイルが旧世界への付き添
いを探していると言えば名乗りを上げる奴らが幾らでも出でくる

「他の奴らが、というより俺が旧世界で色々やらかすという事が知
られたら駄目だ。だからそれはしない」

ますます訳がわからなくなってきた

あと、聞き逃しそうになつたが

「や、りかすつて何をだ？」

その口ぶりじや悪事を働くこゝうと思われても仕方ない

「金儲けだ、俺は確実に金を儲ける事が出来る。例えば価値が一気に上がる土地を知つてたりな」

．．．何故知つているかは置いておこゝ

「だつたら何故俺なんだ？それにそんな事が判つているなら一人でやれば良いだろう

俺とこいつは初対面

それに一人でやつた方が取り分が多いからいい筈だ

「別にそれなりに優秀で裏切らない奴なら誰でも良い。

だが、そいつが裏切らないかどうかなんて判らん。だから裏切った場合、それ以前に断つた場合に殺したら俺が疑われてしまう近しい奴は駄目だ。

その点お前とは初対面だ。お前を殺しても疑われ辛い、酒場にいた奴らが俺がお前を連れて出た事を覚えていたとしてもだ、俺にはお前を殺す動機が無い、

何なら遺体をお前だと判別出来なくすれば尚良し、それどころか俺の力で死体すら残さない方法もある、

それに俺はサー・クロコダイルだ。酒場にいる奴らの意見よりも俺の事を皆信じるだろうしな。この家に俺とお前が入ったのを見た奴もいるかもしけんが、家からは死体も肉片も血液の一滴すら出なければ何も出来まい。

それにだ、多分お前は断らない。というより断れない。お前、俺より恐い奴に会つた事無いだろう？

……………「いや、俺はかつて無ごみの生命の危機にかられていた

様だ

初対面で「この事は殆ど知らないが、これだけは判る

」「こつはやると云つたら殺る

とこつより俺は何をやられるのだろうか

近しい者が断つても殺されると云つ事は相当ヤバイ事なのだろう

取り敢えず、今の俺に出来るのは

「……あなたが一人でやらない理由は？」

この悪魔の話を聞く事だけだ

「……悪に屈したとも言える

「そりやお前、一人で出来ない事でも一人なら出来るつて云つのは建前で、共犯者がいた方が心強いだろ？」

「……前言撤回

悪魔では無く魔王だつたらしい

「……共犯って、何をするんだ？」

するんだ？と言つたのはこの魔王にお前に命令されたからやるので無く、俺の意思でやるとこつお前に屈した訳じや無いとこつアピールだ

「……それが伝わったかは置いておこつ

「先ずは魔法で麻薬を隠して密輸でもして金を稼げりつと云つ

「……おい、待て

「その麻薬は？」

「麻薬を取り扱ってるマフィアでも襲えば良い、大丈夫だ皆殺しにすれば目撃者ゼロ。一般人にバレたからオコジョ刑つて言う事にはならない」

オコジョでいろじや 無い刑罰が待つてると思つが
．．．流石に止めたほうが良いな

「それはちょっと、やり方を変えないか？」

「．．．それもそつか、よしやり方を変えよう」

良かつた、こいつにも良心と言つ物が少しあ
「効率が悪いな、そのマフィアを乗つ取つてもつと扱う麻薬の量を
増やした方が良いな。しかしどうやって増やそう」

またもや前言撤回

良心何て物欠片も無かつた様だ

せめて今日が人生最大の厄日でありますように
これ以上の厄日など死ねる

と、そう言えば

「何で価値が上がる土地なんて知ってるんだ？」

「．．．占いだ」

全くもつて前途多難だ

全てには此処から始まつた（後書き）

思い立つたが吉日
それ以外は（　　）

カゲタロウの憂鬱（前書き）

最悪の職場

カゲタロウの憂鬱

俺はテオドラに適当な理由をつけ旧世界に行くことを話した

最初は渋っていたが結局向こうが折れ、俺は旧世界行きの許可を貰つたその日にカゲタロウを連れて帝国から離れた

向こうに着いて早速一手に別れてチンピラを片つ端から恐喝して金を搾り取つた後、帝国で購入した記憶を弄り変える薬で記憶を消去これを繰り返すと一人分の飛行機代位は軽く出せる金がすぐに出来たそして飛行機でコロンビアへ飛び、そこで幾つもある麻薬組織を片つ端から痛めつけ、乗つ取つた

その結果、国内の全ての麻薬組織を束ねた巨大組織バロックワーカスがこの国に入つて僅か一月程で完成した

そして首都ボゴタの土地を片つ端から地上げる作業を始めた

金と土地、家を用意してそいつらを移住の交渉をして相手が渋つた場合数々の嫌がらせを行い、ボゴタの土地のほぼ全てを手に入れたこの旧世界に来た時に将来大きくなる都市や、金がかなり動く出来事、原作で起きるイベントなどを覚えている限りノート書き記した

このノートのおかげで次にどうすれば良いのか迷わないで済む

俺の中で不安材料であつたカゲタロウも予想以上に優秀だつたこと

もあり、今の俺はとても機嫌が良い

次はメキシコ辺りに手を出そうかな

・カゲタロウ s.i.d.e -

俺の中でのクローダイルの印象は悪くなる一方だ

行かないでくれ

と泣きじゃくりながらクローダイルの脚に掴まるテオドラ第三皇女に明らかに面倒くさそうな視線を浴びせ続け、終いには舌打ちをした時

「アンタそれでもテオドラ様の騎士か！？」

と言つてやつた

・・・心の中で

その舌打ちに気付き、クローダイルの顔を見た時の第三皇女の顔は忘れられないだろう

「「めんなさい、嫌はないで」

と泣きながら何度も繰り返す第三皇女は

「俺がテオドラ様を嫌いになるわけないじゃないですか、ですから旧世界行きの許可を貰えますよね？」

と和やかに微笑みながら言ったあいつの言葉に折れた

「ロンビアでマフィア連中と退治した時

「殺し合え、生き延びた一人だけ俺の部下にしてやる」

と奴が言った直後、十数人が同士討ちを始めたのは驚いた

あいつが國中のマフィア共を纏め上げた後にバロックワーカスという名前の組織を再構築したばかりの頃、ボゴタという所の土地で一軒のレストランが立ち退きに応じなかつたことがあつた

俺はあいつに

「あそこは何代も前から今まで引き継いできた庄らしく、立ち退くことはないだろ?」

と、あの土地を諦めるように進言した

その次の日あいつと飯喰つてる時に麻薬中毒者がトラックでそのレストランに突っ込んだというニュースを聞き

「せつと立ち退いていたらこんな事にはならなかつただろう?」

と俺の言葉に

「全くだ、素直に交渉に応じていれば俺もこんな手段は使わなかつたんだがな、俺に逆らうとは馬鹿な奴らだ」

とこう返答が返ってきたことで背筋が震えたのは記憶に新しい

そんな俺の中で評価最低の奴にさつき呼び出された

「失礼します、ボス」

一声掛けて部屋に入る

するとバッジが投げ渡された

「何ですか?これは?」

「お前にはMr.1つていう役職に着いてもらつ

「その役職ではいつたいどんな?」

「つまりこの俺、Mr.0の補助でバロックワークスで俺の次に偉い役職だ」

・・少しだけ評価が上がった

カゲタロウの憂鬱（後書き）

次も早めに更新頑張ります

クロ「ダイルカンパー」（笑）（前書き）

今回はカゲタロウ視点オンリーです

クロコダイルカンパニー（笑）

- カゲタロウ side -

バロックワーラスはクロコダイルの方針で利潤を求めて只管に勢力圏の拡大に勤しんだ

あいつが今求めている利潤とは金より土地、武力、人のことでそれを得るために国外での抗争を繰り返した

立て続けの抗争には金が馬鹿みたいに掛かつたが抗争の最中も様々な国際マフィアと麻薬取引を自国内で続けた結果抗争資金が無くなる事態も起こらずに済んだ

対称に自分達のシマが抗争地帯となっている抗争相手の奴らはそんな危険な土地で商売など出来る筈もなく衰弱している時に潰されていった

中には降伏しておきながら内部で裏切った奴も居たが、あいつがそれを許す筈がない

舌を噛み切らせないようにとボールギャグを装着させた状態で頭を耳の穴、口の中まで念入りにウォッカ濡れに、その後に火を付けて人間線香花火にさせられていた

頭しか燃えないから中々死ねずにジタバタと苦しんで最後にはショック死

．．．あんたマジで恐ろしいわ

そんな見せしめのお陰でウチに宣戦布告されたら直ぐに降伏するよ

うな奴らがかなり増えてきた

結果、金はポンポン飛んでいたが、僅か半年程で構成員は5000に届き、準構成員を含めれば8000超の国際マフィアに

新しく部下になつた奴らが言つてはあいつは恐皇とか言つてんでも
ない呼ばれ方をしてるらしく
あいつはその呼び名についてブチ切れると思つていてが寧ろ喜んで
いた
聞けば世間に恐れられた方が仕事が渉ること

そして今日もあいつに呼び出された

「麻薬、売春、恐喝、みかじめ、強盗とか色々やつてるウチだがそ
うそろ次の段階に移るやつと思つてる」

「……次は国でも乗つ取るんですか恐皇さん？」
「マジで言つたらうだから困る

「それも良くな……だが、先ずはウチを合法化をせんつもりだ

いやいやこやこせ

「待て待て、合法化つてバロックワーカスはどういふんだよーへーこ
こまでデカくしておいて潰すのかよー？」

犯罪組織だがこの会社には既に愛着が湧いてしまっている

「いや、バロックワークスも続ける。俺が言いたいのは俺達はかなりの武力を手に入れた、今度はそれをバックアップに真っ当な商売を始めようってことだ」「

・・・暴力を行使するような商売が真っ当な商売と言えるのだろうか

「・・・それで?何を始めるんだ?」

「不動産、カジノホテルの経営とか良いんじゃね?ってことで警察搔い潜るために会社作つたからそれでデッカくいこひぜー」

・・・ああ、もう決定事項なのね

「で、社名は?クロコダイルカンパニーとか?」

「お前、ネーミングセンス皆無どじろか行使すらしてねえな。社名はホテルバロックワークスにした」

ホテルバロックワークス考えた奴にネーミングセンス皆無つて言われた

・・・ていうか
「一切隠せてねえよーーー」

クロ「『ダイルカンパー』（笑）（後書き）

カゲタロウもだんだん打ち解けて来ましたね

次は皆大好き『オドラ slide』の予定です

ପାତା-୫୫୫

次の更新は遅くなるかもしないので短いですが投稿

アリカ女王が亡くなってしまった

- テオドリク side -

クロコダイルが帝国を離れた後、オステイア崩壊や、アリカ女王が捕まつたりなどと様々な事件が起つた

暫くはそれらの対応に追われる日々
最近はやっと落ち着いてきた

そして今日はおよそ半年ぶりのクロコダイルとの話合
呼び出しに応じてくれた、唯それだけのことの筈なのにとても嬉しく思う

こいつでも帰つてきても良いくじたまにの休日は彼の家に行き、
溜まつた埃を掃除していた

その度に経過した日数を実感する
彼が出て行つてからの数日は何もする気が起きず、部屋で泣いてい
るだけの日々だった

戦争が終わつたことは喜ぶべきことの筈なのに、クロコダイルが居
なくなつてからは素直に喜べなくなつた

妾はクロコダイルと戦争で疲弊した帝国を建て直したかった

戦争が続いて居ればクロコダイルは側に居てくれたのだろうか
そんな醜いことを考えてしまう自分がいる

一度は死のうとさえ思つた

が、死ねば彼とは会えなくなる

そのことが堪らなく嫌で死ねなかつた

しかし、今日やつと会える

ここで働いて居た時に欲しがつてたクロコダイルのスーツをプレゼントに

彼の家のタンスの中を何度も整理しているから

服のサイズは把握している

多少太つても着れる様に少し余裕を持つて仕立てて貰つた
快適な時間を過ごしてもらえるために彼が普段吸つていた葉巻も買
つておいた

自分のお小遣いでなければ意味が無いと思い全て自腹
暫くは好きな物を買えない日々が続くだろうが構わない
早く会いたい、会いたくて仕方ない

そう思つていると部屋にノックの音が響いた
「テオドラ様、クロコダイルです」

「入るのじゃ」

自分の声が酷く震えて居るのに気付いた
ドアが開いてその姿を見て思つ

失敗した

身長がたつた半年でかなり伸びている

肩幅も広くなり

どう頑張っても用意したプレゼントは着れないことは明白
涙田で半年の間会えなかつたことを呪つた

（後書き）おとせたおとせたおとせたおとせた（アーラー）

公式設定で2530に設定しています

理由を深め上めり---（前書き）

思ひのほか早く出来ました

理由を突き止めりーー

- テオドリ side -

「まあ、座るのじや。お主の好きな葉巻を用意して置いたのじや」

クロコダイルを前にしても無駄になってしまったステッジのことを考
えてしまつ

無駄になつたからといって高かつたから捨てたくは無いし
まあダブルスースだから自分が大きくなつてから着れば良いか
と、踏ん切りを付けようと頑張つていると

「なら座らせていただきます」

ヒドア越しでは感じる事の出来なかつた肺の芯から震えるよつた声
が聞こえクロコダイルに目を向けた
そこには田を見るだけで逃げたくなる程鋭いが逸らす「」
ことが出来る
この側に居るだけで身の毛のよだつ程の恐ろしさ
ああ、クロコダイルが田の前に居る
そのことに感動しつつも彼に話を振る

「吸わんのか? もしかして銘柄を間違えたのかの?」

そんな筈は無いとは思うが

「それよりも早く今回の呼び出しの理由を聞きたいです」

もう少し話をしたい

そつ思につつもクロノダイルの雰囲気に押されてしまつ
「や、やうじやな。わかつたのじや。」

呼び出したのはお主が田世界で設立したバロックワーラークスといつ組
織についての話じや

「

話を聞いた時は耳を疑つた

マフィアを設立して麻薬を流通させていなど彼の本質を知る者は
信じられないだろつ

紅き翼の皆は何か理由があるので無いかと言つて
いた
自分でもそつ思ひその理由を聞く為に呼び出した

「やはつやの」とですか、ビリまで知つてゐるんです?.

「かなりの量の麻薬を取り扱つとも無く凶暴な武闘派マフィア
と聞いたのじやが本当か?..」

「ええ、大体そんな感じです。で、話とは何が聞きたいのですか?..」

「そのマフィアを設立した理由は何なのじや?..」

「そりや金が欲しいからですよ」

「. . .だから麻薬か?..」

「ええ、そつです」

ジャックにも言われた

正直に言わないかもしけないと

大戦中は外道を行つたがそれには理由があつた

帝国を守る為という理由が

それにこの男はメリット、デメリットを考えて行動する男だ

帝国の英雄という金なら幾らでも手に入る立場にありながら旧世界の金の為に外道を行うとは思えない

明らかにデメリットの方が上回つてゐる

「正直に答えるのじゃクロコダイル、何故旧世界なのじゃ？お主が外道を行わなければ達成できない何かとは一体何なのじゃ？」

「ですから金の為ですよ」

「嘘を付くなーお主が今更旧世界で金の為に働く理由など無い筈じやーーあのカゲタロウという奴が原因かと考えたがお主があんな奴に良いやうに使われる筈が無い、話すのじゃクロコダイルお主が旧世界で力を溜めている理由はなんなのじゃー？」

「今回の件は俺の立案です、カゲタロウは関係ありません」

「占いで色々解つたから旧世界へ行く、そういうお主は言つたのじゃ。お主は占いなど出来ぬ筈、その占いを行つた者は誰じゃー？やつは句を占つたのじゃー？」

「…………」

「この沈黙は凶星か？」

恐らくはその占いの内容がクロコダイルにとって許容出来ないもの
だったのだろう
だから動き出した
そしてそれは話せない内容 . . .

「今日は一先ず帰らせて貰います、続きはまたの機会に失礼します」

「待つのじゃークロコダイル！」

呼び止めたが早足で去つて行つてしまつた

全然話すことが出来なかつた
だが、クロコダイルが何かに巻き込まれてゐることはわかつた
取り敢えずジャックに今回の話を相談しなければ
ふと、用意したのに結局口を付けなかつた葉巻を見る
彼の匂いを思い出したくなり
その一本を吸つてみる

「ゴホッ！－ゴホッ！－」

まだ幼い体躯は煙を受け付けることは無かつた

自分にはまだ早い

そう思い、それを灰皿に入れ、そこから広がる匂いに心を落ち着かせ
愛しい男がこれから何をなそうとして居るのかを突き止めることを
誓つた

「占いで色々解ったから田畠界へ行く、やつおせは聞いたの。せじのたのまつたの。せじは占いながら出来ぬ篭、その占いを行つた者は誰、せじや！ へやつは何を占ったの？」

・ ・ ・ 一体どんな言い訳したんだあの日の俺よ

理由を突き止めり——（後書き）

テオ、前提が間違っているよ
君たちが思っている本質は勘違い
更にクロコダイルからしたら神様を楽しませられない今の帝国に居
ること自体がデメリットなんだよ

そしてクロコダイルは困った時に口こいて言つてその悪い癖を直せ

明らかな人選ミス（前書き）

最近かなりのペースで更新して
る
誰か褒めて（ * 、 ）
とまあ冗談はさておき実際このペースで更新かなりキツイ
このペースで書いてる他の作者さんマジ凄え

明らかな人選ミス

原作のアリカ処刑を食い止めるのには参加することにした
参加せずに紅き翼の連中と気まずくなつて連絡を取り辛くなるのは
避けたかったからだ

病室でラカンとの打ち解けてからナギ達もラカンと同じように接して来るようになった
麻薬に関して口出しをして来るのが非常にウザいがそれを無視すれば良い友人達だ

ちなみに今は皆で京都に居る
心良く話せる友人が出来たことにとっても嬉しく思う
最近は今までの自分とは変わつたと実感することが増えてきた
例えばラカンがやたらと
テオドラは良い女
将来は絶対に美人になる
泣かせたら承知しない
などと惚氣を言つて來たから

「やつぱりな、前々からデキてるんじゃないかと思ってたんだ。俺
はお前らを応援してるぜ」
と言つてやつた

昔の俺なら心から他人の祝福など出来なかつたが
今なら出来る
こんな違いがとても嬉しくてこの世界に来て良かつたと実感する

- ラカン side -

テオドラすまない

クロコダイルにお前を意識させようと頑張つたんだが

「やつぱりな、前々からテキてるんじゃないかと思つてたんだ。俺はお前らを応援してるぜ」

・・・寧ろ悪化してしまった

訂正しようとしたが

心の底から祝福してくれているあいつの笑顔を見て何も言えなかつた

ヘタレな俺を許してくれ

その後詠春やアリカ達に散々怒られた

- カゲタロウ side -

「ボス、カジノって言つてもこの外觀は幾らなんでもはっちやけ過ぎじやないですか？」

クロコダイルがベガスに建てたカジノホテル

どんな馬鹿が聞いてもマフィアの一次団体と一発でわかる社名でベガスの審査を抜けるとは

どんな手段を使えばこんな事が出来るのか

いや、この人のことだからどうせ恐喝したんだろうけどさ
でもどんなレベルのお偉いさんをどんなレベルで恐喝すればこんな
無茶が通るのだろうか

いや、今はそれよりも新しく出来たホテルバロックワーカス一号店
が問題だ

クロコダイルが外観のデザインを決めたと聞いて少し不安になつた
しかし、記念すべき一号店のデザインを自分で決めたいという気持ち
もわからないことでもないし

それにデザインに夢中になつている間は他に喧嘩を売るような行為
をしないだろうと思い

余計な口を挟まなかつた

そして建設を依頼して暫くたつた今

出来上がつたと聞いたのでさつさと仕事を切り上げてベガスへ来た

が、このデザインは一体何なんだ

「どうだ？ カジノに相応しいド派手な建物じゃね？」

脚が竦みそうになる舌のようになに伸びる長く広いレッドカーペット
それを辿れば見える真っ赤なレッドカーペットによく映える白で描
かれた建物の入り口へと続く階段はまるで歯のようだ
シルエットを色濃くする建物全体に仕込まれた黄色いイルミネーシ
ョン

そして冒頭へと戻る

「ボス、カジノって言つてもこの外觀は幾らなんでもはつちやけ過ぎじゃないですか？」

「いや、これ位やつてやんないと話題にならんじだろ？」「

「やつや話題性は充分でしょ？ だつてワーダもの。」「

そう

この建物はワーダモチーフにしてくるのだ

道行く人はガン見

．．．幾ら金を掛けたらこんな建物が出来るんだ

「いやいや、絶対これからはいつもカジノが流行るんだつて」

「こいつがこいつの根拠はわかってる

「また占いですか？」

「．．．うそ」

全くもつて前途多難だ

．．．これ口癖になつてきた

明らかな人選ミス（後書き）

テオドラとカゲタロウの人選ミスの話

一人はきつヒナイスクンヒ（前書き）

アンチ沸くのも嫌なんで警笛しちゃいます

注意、結構洒落にならない外道成分が含まれてます
俺外道（笑）大好きレベルなら読まない方が良いですよ

一人はきつとナイスクンビ

- カゲタロウ side -

此処数年は色々なことが起きた

「俺たちの戸籍つてどうなってるんですか？」

そんな迂闊な一言が原因で俺の名前は鰐淵鶴太郎になり、その上仮面まで外された

「カゲタロウだから和名だろ？これだけ厳つい名前なら直ぐに有名になれるそうだ。てかお前仮面外したら特徴ねえな」

ちなみにこいつはサー＝クロコダイルのままらしい

あっちなら兎も角旧世界でサーの称号を使っても良いのだろうか

それから暫くしてバロックワーカスはソビエトの領土にまで勢力を伸ばし始めた
チエルノブイリでの事件以後に放射能の悪影響などを証明しようと動いた学者が次々に不審な死を遂げたり
マフィアに狙われているというのにソビエト政府からの妨害が皆無だつたり

などとクロコダイルと出会つてから色々と修羅場を潜り抜けた俺でも流石にヤバ過ぎると思えることばかりで
そのヤバさは素人目にもわかる程、晴れて俺達の名前は全世界に知れ渡つた

その後一気に勢力を拡大してからは明らかに俺達をモデルにしたような映画が出来たりとマフィアとは思えない程有名人になった

今では直系の構成員が20000人を超えて様を含めれば何人居るのか予想も立てられない程にデカくて凶暴なマフィアになった

最初は慣れなかつた鰐淵という名前も世間では定着してしまつたようだ

そして今日は束の間の一時

我らが恐皇サマは一週間程前に詠春さんの家に産まれた娘さんを見に行つた

今頃はその娘さんに泣かれているのだろう
仕方ないよね、あの人恐いし
と思つてると

「鰐淵さん、ボスからお電話です」

部下の一人がそう言った

マジかよ・・・そう思いながら電話を取る

「どうしたんですボス？木乃香ちやんでしたっけ？その子に泣かれて寂しかつたから電話して來たんですか？」

「何故泣かれたことを知つてゐるのか問い合わせたいがお前に仕事だ」

やつぱり泣かれたのかと思いつつ話を聞く

「肌は褐色で魔族とのハーフの魔眼持ち、今生えてるかわからんが
髪は黒の赤ん坊を物心付く程度に育つ前に探し出せ、日本時間で去

年の四月一日から今までの間に産まれてこると細づ

「はあ、また例の占いですか。わかりましたが何処を探せば良いんです？」

クロコダイルの占いのノートの内容は決まって利益を得るか、損害を防ぐかをしてくれる

今回もその赤ん坊が俺達にとつて重要な存在になるんだろう

「そうだな・・・中東かな？正直わかんないわ、でもどつか居る筈だから」

「・・・・・広いとかそういうレベルじゃねえなオイ、その赤ん坊が物心着く前に見付けるとなると金が相当飛びますが幾らまで使つても良いんですね？」

正気の沙汰とは思えない

たかが赤ん坊一人に幾ら掛けるつもりだ

「お前の裁量に任せると、早めに見付けてくれや」

「それ程までに重要な存在ですか、わかりました。で、その娘をどうするんですか？流石に赤ん坊を殺したくはないんですが」

「俺の娘にする」

ブチツ

俺は大きく息を吸い込む

「見損なつたぞクロコダイル！そんなことに部下が血と薬に塗れて

必死に稼いだ金を使つなどとあんたが血迷つ程に詠春さんの家の木乃香ちゃんがそんなに可愛かつたのか！？ああ！？

久しぶりに怒鳴り散らす

「頭冷やせよ、娘が欲しいってだけで『凡談みたいに金使う訳無いだろ？』

「．．．何が本当の目的何ですか？」

此処いらで聞いて置かないと後ではぐらかされそ Rodgers だからな

「なに、後数年で産まれてくるナギの息子のパートナー作りだよ」

あつと今騒いでいるのだろう

「相変わらず悪趣味ですね」

そう呟いた

紛れもなく本心からの言葉だった

「そんなの今更だろ、確か名前は龍宮．．．じゃなくてマナ＝アルカナだつたか？ああ、言わなくて済むと思つが、『親は殺せば良いんですね？』．．．良くわかつてゐるじゃないか」

わかるよそれ位

何年あなたの右腕やつてゐると思つてゐるんだ

「人はきつとナイスクンビ」（後書き）

赤ん坊誘拐するオリ主なんて見たこと無いわ

あとカゲタロウ

お前も悪趣味だよ

マナ＝クロ「『ダイル（前書き）

久しぶりの主人公視点

マナ＝クロノダイル

「 ちいさな子がいるよ。」

スヤスヤとベッドで寝ている赤ん坊を挟んでカゲタロウに声を掛ける
生後約半年らしい

今日はマナがウチへやつて来る予定だった

攫いに行つてた奴からマナを受け取るのはカゲタロウが無事に済ませて

此処まで連れて来る間はぐつすり寝ていたらしく特に苦労せずに連れて帰つて来れた

それからは用意して置いたベッドに寝かせて

部下達には本屋へと赤ん坊の世話の仕方が書いてある本など取り敢えず世話の仕方がわかる物を買いに行かせた

しかし、部下達を送り出した直後問題が発生した

カゲタロウがほっぺをつついて遊んでいた所為でマナの目が覚めその上、ほっぺをつつかれたのがよつぼど気に入らなかつたのかグズり出してしまつたのだ

ベビーシッターが来るのは明日からで

今は俺とカゲタロウしか居ないと言つのにだ

残つた俺達二人は取り敢えず世話をして見たく思つて何をすれば良いか聞くために詠春の家に電話を掛けた
が、普段は奥さんが世話をしているが今は不在なのでわからないとのこと

詠春自身はゲップさせないと困ることしか知らないからこそ
カゲタロウと話し合つて取り敢えずゲップをさせようといつ話にな
りコーラを飲ませようとしたが口に含んだ瞬間に大泣き
今は必死にあやして落ち着き眠つたところだ
「どうあるつてミルクとか用意して置いたら良いんじや？」

カゲタロウが部屋の隅に視線を向け俺も釣られてそつちを見る
そこには大量の粉ミルク、紙オムツ、赤ちゃん服など必要そうな物
が積み上がっている

カゲタロウがマナを受け取つている間に俺が用意した物だ
「そうじやなくてさ、ほら良くあるじやん熱湯で消毒してから使つ
みたいな」

俺は断片的な知識を寄せ集めて解決する事にした
「…マナですか？」

カゲタロウ君、そんなことしたらマナ死んじやうよ
「いやいや、おかしいだろ。きっと紙オムツとかの話だろ、清潔に
みたいな」

例え使い捨てとはいえ油断してはいけないのだらう

「幾ら何でも紙オムツを熱湯消毒なんて聞いた事無いですよ、何か
と勘違いしてるとんじやないですか？」

「いや、ゲップやら何やら俺達の予想も付かないことをさせるんだ。
熱湯で消毒された紙オムツも不思議では無い」

しかし、試しに熱湯消毒した紙オムツはドロドロになつた

そしてカゲタロウが何かを思い付いたらしく
「確かに肌位に温めるんじや無かつたですか？」

「 . . . マナをか？」

人肌位に温めるまでも無く人肌だろ

「紙オムツの話でしょ？ 冷たいとビックリしちゃうみたいな

・ . . いや、でもこれ

「冷たいか？」

「冷たくは . . . 無いですね、どうしましよう」

俺達が困つていると扉が開いた

「鰐淵さん！ 子育ての本買つて来ました！」

部下が帰つて来た

「やつとか！ 待ちくたびれたぞ！」

「ちよつとお前らそんなに煩くしたら . . .

あー、だー

「起きちやつたじやねえか馬鹿。で、何すれば良いんだ？」

カゲタロウと本を覗き込む

「えーと、消毒するのは哺乳瓶みたいですね」

「人肌に温めるのはミルクの話か

「ミルク飲ませた後にゲップさせるみたいですね」

「ついで、一日中俺達は知識を得ながらマジナの世界をしていた

マナ＝クロ「ダイル（後書き）

たまにはこういつ話もアリかな？

私が見ても娘さんです、本当に有難いござりました（前書き）

少し時間が飛びます

私が見ても娘さんです、本当に有難いと思いました

・マナ side・

今さつき麻帆良学園への入学式が終わった
入学式があつた体育館から出てお父さんを探す

「お父さんその人は？」

待ち合わせ場所にはお父さんとカゲおじさんその他に女の子を連れた
男の人が居た
親し気に話して居る所から知り合いのようだ

「君がマナちゃんですね、はじめまして私の名前は近衛詠春と言
います」

詠春さんはそう言って頭を撫でて
「はじめましてマナ＝クロ＝ダイルと申します、お父さんのお友達
ですか？」

「ええ、私は君のお父さんとは古くからの友人です。それにしても
礼儀正しい良い子ですね」

詠春さんはそう言って頭を撫でて
「ほら、木乃香も挨拶しなさい」

後ろの女の子に声を掛けた

「はじめまして、近衛木乃香言います、いつも父様がお世話をなつ
てます」

と挨拶をしてきた

「一応赤ん坊の時に会つてゐるんだがな、俺はサー＝クロノ＝ダイルだ」

「鰐淵竜太郎だ、木乃香ちゃんはしっかりしてゐる流石詠春さんの娘さんだ」

お父さん達を前に良く恐がりず居られるとは凄いなと感心していると

お父さん達に挨拶を済ませた女の子は私の方にむつてきた
「はじめましてー。ウチ木乃香つて言つたよ、マナちゃんこれからよ

うじくなー！」

「ああ、これからよろしくな木乃香ちゃん」

聞けば木乃香も今年から麻帆良学園の一年生らしい
その後詠春さん、木乃香ちゃん含めて皆で『』飯を食べに行つた
食事の場でおじさんが私が友達が居ないのを暴露したり、ならウチ
が友達にと木乃香ちゃんが立候補したり、木乃香がちゃん付けする
のを止めてと言つたり、なら私もマナと呼んでくれなどと色々あつた

木乃香達と別れホテルに戻つてふと思つ

お父さん達と離れて寮で過いせむだらうかと

普段から無愛想でめちゃくちゃ恐くて話し掛け辛いお父さんだがそ
れでも一緒に暮らしたいのが本音だ
でもそれは無理と言われた

理由は私の安全の為のこと

バロツクワークスへの復讐を狙つ者から守る為に私にはガードが着
いている

が、流石に学校内までガードを連れ込むことは出来ないから治安の

良い学校に通わせると言つのがお父さん、おじさんの考え方らしい

お父さんが私を心配してくれることにとても嬉しく思う

何故なら普段から血の繋がった娘を愛していないのではないかと思えるくらい無愛想なお父さんが実は心配してくれていたのだ

嬉しいに決まってる

だが、愛してくれていると知つたことで余計に離れて暮らしたくはない

まあ、お父さんに迷惑を掛けたくは無いから大人しく言つことを聞けれど・・・

-詠春 side -

おかしいですね

二人が結ばれたという話は聞いていないのですが

・・しかし

「はじめましてマナ＝クロコダイルと申します、お父さんのお友達ですか？」

鋭い目付き、艶のある黒髪、褐色の肌

誰がどうみても一人の娘

産まれて半年程経過してからの娘が出来たという連絡やクロコダイルの姓を名乗つていてることも考えて何か事情があるのは明白

今までクロコダイル、テオドラ様両名から何の話も聞いていないことも含めて触れて欲しくは無い内容なのでしょう

「ええ、私は君のお父さんとは古くからの友人です。それにしても礼儀正しい良い子ですね」

全く、さつたとくつ付いてしまえば良いのに

私が見ても娘さんです、本当に有難うございました（後書き）

どう見ても一人の娘です本当に有難うございました by 詠春

監のトライアマ（前書き）

奈々様の新しいブルーレイ・・・楽しみだ

- カゲタロウ side -

目の前では一人の男が正座している
「話を纏めるとお前が攻めてきたのはメガロの指示ではなく独断なんだな？」

ひんやりとしたコンクリートに正座しているパンツ一丁の男

「その状態なら逃げられないだろ、それに豚野郎に服を着せて自分を俺らと対等に勘違いされても困るからな」との指示がパンイチの理由、勿論指示の出處は恐皇様

目の前の男は震えながら頷く

俺らの悪名はやはり魔法世界でも広まっていたようだ
だが、メガロは大戦時の恐怖からか何故か未だにクロコダイル庇う
第三皇女の手前か控えめに注意してくるだけ

軍に至つてはビビり過ぎて少しでも悪口を言えば英雄を侮辱したと言つてかなり厳しく処分して一度と言わないようにしているらしい
ビビりまくつてる理由は今の軍の上層部の全員が大戦期を経験している世代でクロコダイルの恐ろしさを知つてゐるから
特に大戦期に使いつ走りをしていた奴等は軍部の行なつたクロコダイルの事に関してのカウンセリングで全員が心的外傷後ストレス障害と診断されたらしい

全て目の前の男から聞いた

この男は人々を苦しめるクロコダイルに對して何のアクションも示さない軍に腹を立てて攻めて来たらしい

大した度胸だ

単身攻めてくる自信は確かに本物で中々強かった

俺だけなら梃子摺つただろう

だがこの男軍に務めていながらクロコダイルの理不尽な体質を知らなかつたようだ

そのままボコられ尋問され今に至る

「俺は此れからどうなるんでしょうか?」

殺されるんぢやないか?

そう言つと涙目になりながら

「そうですか」

と一言

しかしこの男すっかり敬語が板に付いている
そんな事を思つているとクロコダイルが部屋に入つて來た
クロコダイルを見てシャキッと言つ擬音を使いたくなる位に男が背筋を正す

「お前はどうする?殺されたいか?それとも奴隸のように俺に扱き使われるか?」

え、開口一番に何その究極の一択

しかし男は

「是非とも奴隸で!—」

・・・即答だつた

攻めて來た当初の度胸は何処へやら

よつほど恐かつたのだろう

まあそりやそとか、世界中から恐皇つて呼ばれてるんだもの

「んー、じゃあお前の名前は……ボン＝クレーで」

「この男のネーミングセンスはどうなってるのだらつ……」

「ありがとハジゼーこます……」

あ、その名前で良いんだ

「なら早速ボンちゃんらしくオカマにならなことな」

「は？」

何がボンちゃんらしくなのかはさて置きハジセイ愁傷様
やたら屈強な男等に引き摺られて行き
アツー

との叫び声が

「「「うわ……」「」」

かなり耳に残る叫び声だった

数日後

クロコダイルに呼び出された

そこで見たのは

「カゲタロウ、今日からボンちゃんをお前の下に付ける」

「じょーうだんじやないわよおーう、カゲちゃんの下に付くのはオ
ーケーだけどマーチにしてくれるつて言つ話だつたでしょーう?ク
ロちゃんはあちじを信用してない訳え?」

「実力は信用してるや、だが信頼は出来ないからなカゲタロウの下

で実績を積んでくれ
・・・オカマだつた

サブタイトルを考えるのが何気に楽しみだつたりする

楽しく虚しい恋バナ（前書き）

お待たせしました
結構用事が多くて中々涉りませんでした

楽しく虚しい恋バナ

-マナ side -

「聞いてくれあやか、桜咲のやつ昨日もまた夜中に部屋から抜け出したんだ。あれは絶対男だ、間違いない」

「もう、マナさんったら。何度も言つてるでしょう、同じ部屋のあなたが門限を守るよう注意するべきだと。」

「今朝ちゃんと言つたさ。愛しの人の人とはどうだい？進んでいるかい？とね、でもあいつ私をキツく睨んで出て行つたんだ」

「それは注意でも何でも無いでしょう、きっと彼女には人の恋路を探つてくる嫌な奴と思われましたよ」

「そんなつもりはなかつたんだが、私はお前が夜中にで歩いているのを知つてゐぞという意味で言つたんだ」

今日はこの2・Aに新任の先生が来る日だ

周りはその先生について話している

そんな中で私とあやかは恋バナ中である

それもその内容が自分達ではなく他人の恋という見てるととても哀愁感漂う恋バナである

ふと扉を見ると噂の先生を迎えていた明日菜達が教室に入つて來た

「おはよー、明日菜と木乃香^{ヒノカ}苦勞様。で、どうだ？新任の先生は明日菜のお眼鏡には叶つたのか？」

「んー、あの先生は明日菜のオジサマ趣味とは今わんやうひつなあ。
でも先生と話してゐる明日菜楽しそうやつたで」

こつちに近付きながら木乃香が答える

「もひ、どこが楽しそうだつたのよ。色々な意味であんなのが新任
なんて信じられないわ」

オジコンである明日菜から見た新任の先生の評価は信じられないと
の事だつた

「さつきまで全然だつたがそう聞くと少し興味が出て来たな

「あら、私は元々興味は有りましたわ。この教室でそこまで興味が
無いのはマナさんだけじゃないですか？それにしても先生まで恋愛
対象に含めるなんて恐ろしいですわね、流石オジコン」

そうだらうか

マクダウェルは爆睡してゐるが . . .

それよりそんな事言つたらまた明日菜が

「あー、あいつはむしろ委員長向けだと思つわ」

「なに？明日菜が怒らないだと？あの年々短気になつてゐる明日菜
が？」

「 . . . 声に出でるわよマナ、つと噂をすればつて感じね . . .
つて、え？」

明日菜の視線を追つと頭の上に黒板消しを乗せている子どもが派手
に転んでいる姿だつた

皆がやがわめく中一言

「あの子が先生?確かに信じられないな。なあ、あやか?」

とあやかの方を見ると

既に子どもの方へ向かつたようで既に居なかつた

「・・・成る程な、確かにあやか向けだな」

そう言いながら自分もこれから的学生生活に少し興味が出て来たことがわかつた

楽しく虚しい恋バナ（後書き）

マナ達の初等部の話もいつか書くつもりです
今回あの二人が登場してないどこのか名前すら出ていないので次の
話には出したいです
そしてマナも少し勘違い

#あと余ったかった（前書き）

感想欲しい

ずっと会いたかった

-ネギ side -

2・Aの最下位脱出を果たし正式に教師として認められてから少し経過し終業式間近になつた

「高畠先生に来て欲しいな、でも今年は成績悪かつたから恥ずかしいな。それ以前に来てくれるかな」

「大丈夫や明日菜、高畠先生なら喜んで出てくれるえ。成績も今回の期末は良かつたやん、マナはどうなん?」

「ああ、来てくれる、らしいぞ。懇々面談の為に日本に来るのは面倒いなどと言われたが来てくれるようだ、シンデレラって奴だな。後、今年はじゃなくて今年もだろ明日菜」

「マナさんの所は相変わらずですわね、何気に毎年来てくれてますもの。シンデレと言いたくはなりますわね、面と向かって言つのは恐いですけど」

田の前で話をしている明日菜さん達皆いつも楽しそうにお喋りをしている
とっても仲良しで羨ましいです、いつも一緒に居るんですか?と来
たばかりの頃に聞いたら
仕方ないだろ、私をときめかせる男が居ないんだから
とマナさんに言われた

明日菜さんは恋バナを良くしているマナさんだが、委員長さんは
くマナさんは恋愛経験が全く無くてそういう方面には疎いらしい

ただ、どう見ても恋人を本気で求めているようには見えない
おそらく他の人の恋路に興味が有るだけで自分自身の事に関しては
さっぱりなのだろう

恋と言うものがイマイチわかつていない僕はそういう話を全然出来
ない

でも今は恋バナをしている訳では無いよつなので僕でも付いて行け
るかもしれないと思い声を掛ける

「階さん、何のお話をしているんですか?」

「三者面談よ三者面談、この間口程決めるプリント貰つたでしょ?
だから保護者が来れそうかどうかの話をじてるの」

「成る程、三者面談の話ですか。うう、緊張するなあ

女子中等部は実家が遠い生徒が多いため保護者への負担を減らすよ
うに一年に一度だけだが面談があり、一年に一度だけと言つ事で保
護者の方々も張り切つて参加してくれる
なので中々結果の出なかつた生徒と新米教師はどうしても緊張して
しまう行事だと新田先生に教えて貰つた
自分も他の新米教師の例に漏れず緊張してしまつ

「私は緊張は特にしないな、寧ろ普段中々会えない父さんと会える
んだから楽しみだ」

マナさんの話を聞いて思った

僕も父さんと年に一度で良いから会いたいと羨ましいと

「マナさんの話を聞いているだけで良いお父さんだと叫ぶ事が伝わ
つて来ます」

そしてもう一つ思つた事を其の仮言つてみた

お父さんの話をするマナさんはとても幸せそうで会つ事が本当に楽しみのようだ

「ありがとう。で、話変わるけどさウチの父さんまた離婚したんだ。

そろそろバツが一桁に届くかもしない」

その後は皆で色々な事を話していたが

僕は二者面談の日程を組む為に皆と別れた

・マナ side・

「久しぶり父さん」

車から降りてきた父さんに抱きつぐ

「ああ、久しぶりだなマナ」

といつて抱き返してくれた

お互に色々と話しながら面談を行う教室へと向かった

「私そろそろ学校側に結婚式で休むつて言うの疲れてきたんだけど、今度からはキチンとお付き合いしてから結婚してよね。知り合つて一週間で結婚つてどんだけなのさ、電撃結婚過ぎるよ。最早稻妻だよ」

「・・・今回こそは行けると思つたんだ」

「毎回同じ事言つてゐる、大体父さんじが2・Aだな。そつと入り

るぞ」

「あれが子ども先生か、ずっと会いたかったんだ。中々面白かった」

面談も終わり今は父さんと外食中

「めちゃくちゃ怯えられてたけどね、一ヤ一ヤしながらガン見されたら誰でも恐がるよ」

父さんは先生の事を初めて聞いた日からずっと会いたかったらしい
でもニヤつきながらの面談つて流石に失礼な気が . . .
と、内心愚痴りながらも父さんとの久しぶりの食事を楽しんだ

やつと会つたかった（後書き）

20年つて嬉しいでしようね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2909s/>

魔法世界に降り立った砂の王

2011年12月19日16時50分発行